16　院内各部署の業務実績

院内各所属一覧（掲載ページ）

	ページ	所　属
診療部	48	内科統括
	50	糖尿病・内分泌・血液内科
	51	呼吸器内科
	52	消化器内科
	54	腎臓内科
	56	神経内科
	58	精神神経科
	59	循環器内科
	61	心臓血管外科
	63	小児科
	65	外科
	67	整形外科
	68	形成外科
	69	脳神経外科
	71	皮膚科
	72	泌尿器科
	73	産婦人科
	75	眼科
	77	耳鼻咽喉科
	78	放射線科
	80	麻酔科
	81	病理診断科
	82	歯科口腔外科
	83	手術管理科
	84	非常勤医師・臨床研修医
診療技術部	85	臨床検査科
	87	中央放射線科
	89	臨床工学科
	91	リハビリテーション科
	93	栄養科
	95	医療技術科
	98	薬剤科

	ページ	所　属
看護部	100	看護部長室
	104	外来
	105	在宅医療支援グループ
	106	手術室
	107	中央材料室
	108	ＩＣＵ（集中治療室）
	109	３Ｂ病棟
	110	４Ａ病棟
	111	４Ｂ病棟
	112	５Ａ病棟
	113	５Ｂ病棟
	114	６Ａ病棟
	115	６Ｂ病棟
	116	７Ａ病棟
	117	７Ｂ病棟
	118	３Ｃ病棟
事務部	119	病院経営課
	120	病院総務課
	121	医事課
	124	医療安全対策室
	126	感染対策室

■内科統括

1　診療体制

消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、神経内科の内科系診療科がそれぞれ高い専門性を発揮すると同時に、相互に協力しながら内科全般の多様な疾患に対応する診療体制をとった。

2　平成 29 年度の診療実績

（1）診療体制の充実

・消化器内科、呼吸器内科、腎臓内科、糖尿病・内分泌内科、血液内科、神経内科領域における専門的な診療を行った。

＊糖尿病・内分泌内科と血液内科は糖尿病・内分泌・血液内科として連携して診療を行った。

・リウマチ・膠原病内科非常勤医師による診療を継続した（毎週火曜日）。

・このほか内科系診療科が分担して下記診療を行った。

救急外来当番（平日午前９時～午後５時）：これまでと同様平日午前、午後各１名が救急外来の診療を担当した。

当直・副直（休日と平日の午後５時～翌午前９時）：これまでと同様当直医１名、副直医１名とし、副直医は昨年度に引き続き平日は午後５時から午後９時まで、休日は午前９時から午後９時まで病院にとどまり診療にあたった。

・初診外来（平日午前）：平成 25 年４月より２名体制としている

（2）内科の医局会とカンファレンス

・内科医局会（毎週火曜日午後５時 15 分から午後６時 30 分）：薬剤の適正使用等に関する勉強会、連絡事項の伝達、懸案事項の打ち合わせ、症例検討を行った。

・早朝カンファレンス：水曜日午前８時から勉強会を行い、後期レジデント、初期臨床研修医を中心に診療知識向上に努めた。

3　新・専門医制度への対応

平成 29 年より日本内科学会に対し基幹施設として専門研修プログラム「富士市立中央病院内科専門研修プログラム」を登録し、連携施設として「東京慈恵会医科大学附属病院内科専攻医研修プログラム」、「静岡県立総合病院内科専門研修プログラム」、「国際医療福祉大学熱海病院内科専門研修プログラム」が登録された。

4　来年度の課題

（1）地域医療支援病院承認後の体制を整備する。

①紹介外来患者受け入れ態勢の整備、待ち時間短縮を図る。

②内科疾患全般の診療の要請に応えながら、より専門的で高度な医療を提供できる能力を向上させる。

③高齢化、医療の高度化にともなって増加している「同時に複数の疾患を有する患者」の診療を安全に行う体制を整える。

（２）研修体制を整備する。

臨床研修（基幹型・協力型）、医学生の診療参加型臨床実習の増加をふまえ、受け入れ態勢を整備する。

（文責　笠井　健司）

■糖尿病・内分泌・血液内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事	藤井　常宏	部長	辻野　大助
副部長	山城　秀樹	専任医師	須藤　英訓
専任医師	石見　公瑠美	専任医師	湊　聡一郎

2　平成 29 年度の診療実績

（1）外来診察（専門）

藤井医師（悪性リンパ腫、骨髄異形成症候群、自己免疫性血小板減少性紫斑病、多発性骨髄腫、急性・慢性白血病等）、辻野医師（糖尿病、内分泌疾患、妊娠糖尿病等）、山城医師（糖尿病、一般疾患）、須藤医師（糖尿病、内分泌疾患）

（2）地域連携室経由での紹介外来患者総数

藤井医師 218 名、石澤医師 180 名、須藤医師 36 名

（3）主な患者統計（新規患者数）

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
糖尿病	505	642	628
悪性リンパ腫	48	73	69
特発性血小板減少性紫斑病	49	47	43
骨髄異形成症候群	35	15	21
多発性骨髄腫	20	15	18

3　来年度の課題

（1）外来受診患者への対応

外来患者が多く、開業医からの紹介患者が増加している。富士市在住の患者が中央病院に集中している現状を踏まえ、市や富士市医師会と協力して、平成 30 年度に「富士市糖尿病ネットワーク」が構築される。今後とも、病診連携を行っていく上で問題点を抽出し改善していく。

（2）入院患者への対応

当科としては、平成 30 年度に新たな病棟医を３名迎え、新しい体制で診療を開始する予定である。当院への糖尿病の紹介患者は、健康診断や症状自覚を契機として近隣の診療所を受診し重度の糖尿病を指摘されるケースが特に多く、初めて糖尿病の診療を開始する方々となる。初期の段階で診断すること、合併症が進行することの重大性、患者自身の病気の理解が重要であり、チーム医療を充実させるとともに富士市全体の病気への関心を高める工夫が必要である。

（文責　辻野　大助）

■呼吸器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	木村　哲夫	医長	橋本　典生
医長	伊藤　昌彦		

2　平成 29 年度の診療実績

呼吸器内科は、一般的な肺炎から当地域に多い気管支喘息、慢性気管支炎、肺気腫といった慢性呼吸器疾患や、肺結核、肺非結核性抗酸菌症、気管支拡張症、肺がん等の診断及び治療を行っている。

気管支拡張症等による喀血に対しては、放射線科に依頼して気管支動脈塞栓術で止血処置を行っている。

また、慢性気管支炎・肺気腫・間質性肺炎等で、慢性呼吸不全状態にある患者に対しては、在宅酸素療法（HOT：Home Oxygen Therapy）を導入し、家庭での酸素投与を可能とし、生活の質の向上を図っている。

肺がんに関しては、気管支内視鏡で診断し、治療は主に静岡県立静岡がんセンター（駿東郡長泉町）と連携し、総合的な治療を目指している。

当院は静岡県東部地区で唯一結核病棟（10 床）を有しており、近年再び増加しつつある結核に対しても治療を行っている。

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
気管支内視鏡検査	44	49	57

3　来年度の課題

平成 30 年度も常勤医師３名による診療体制が継続可能となるため、引き続き安定した診療を行うことによって、地域医療に貢献する所存である。

（文責　木村　哲夫）

■消化器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	佐伯　千里	医長	伊藤　公博
医員	庄司　亮	医員	遠藤　大輔
専任医師	青木　祐磨	専任医師	桐生　幸苗

2　平成 29 年度の診療実績

平成 25 年度の９年ぶりの診療再開から５年目を迎えた。平成 29 年度も消化器内科は東京慈恵会医科大学消化器・肝臓内科および内視鏡科から派遣された６人の常勤医師および４人の非常勤医師で診療にあたった。

主に７Ｂ病棟で入院診療にあたった。入院患者数は毎年、約 100 人ずつ増加傾向にある。

消化器内科専門外来は月から金曜日の全ての外来診察日で行い、内視鏡診療に関しても定時枠を設置し全ての外来診察日に行った。

夜間・休日の消化管出血に対する緊急内視鏡的止血術は、消化器内科医師が当直若しくは副直の際は消化器内科で担当した。その他の日は外科に担当していただいた。

肝生検やラジオ波焼灼術等については７Ｂ病棟のエコー室で行った。

平成 29 年度の検査・治療件数は緊急止血術、各種 ESD、大腸ポリペクトミーをはじめ胆道内視鏡や経皮的ドレナージなど胆膵領域の処置が非常に多かった。

外来診療では新たに、慢性肝疾患におけるサルコペニアや骨粗鬆症の評価、治療を積極的に行った。

内視鏡治療

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
内視鏡的止血術	152	107	135
胃 ESD	31	31	22
胃 EMR	5	7	4
大腸 ESD	12	14	12
大腸 EMR	217	235	240
食道 ESD	7	4	5
食道 EMR	0	2	0

胆膵検査・治療

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
ERCP	207	184	219
EBD	175	141	164
EST	113	105	110
EPBD	2	10	7

経皮的ドレナージ

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
PTCD	18	6	15
PTGBD	62	93	90
PTAD	11	6	5
肝嚢胞ドレナージ	1	2	2

肝癌治療

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
RFA/PEIT	37	34	29
TACE or TAI	51	58	51

3　来年度の課題

診療再開後、当科で診断および治療を受けた患者さんについては疾患別、治療別にデータベースを作成してきた。５年分のデータをもとに様々な解析を行うことにより臨床へフィードバックしたい。また、平成29年度より新たに臨床研究を開始し、当院から研究会や学会などで新たな情報を発信できたらと考えている。

（文責　佐伯　千里）

■腎臓内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	笠井　健司	副部長	高橋　康人
医員	高村　毅	専任医師	嵯峨﨑　誠
専任医師	増田　直仁	医長	高津　宏樹（※）

（※）腎臓内科に席を置き、内科系診療科をローテーション中

2　平成 29 年度の診療実績

富士市 CKD（慢性腎臓病）ネットワークによる市内医療機関からの紹介に加え、市外からの紹介も増加した。二人主治医制（患者さん一人にかかりつけ医と専門医が連携し、継続的に医療を提供するしくみ）による診療も増加した。慢性透析導入患者数に減少はみられず、高齢化などを背景に本年度はすべての患者が血液透析を選択された。富士市透析防災ネットワークでは市内 7 透析施設に MCA 無線が配備されるなど、災害時協力体制が強化された。

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
血液透析施行患者数	282	295	343
血液透析施行回数	2,564	2,776	2,868
腹膜透析患者数（年度末）	15	17	13

慢性透析導入患者数	84	97	99
血液透析／腹膜透析	83/1	94/3	99/0

急性血液浄化施行患者数*	43	62	47
持続血液濾過透析	33	46	38
エンドトキシン吸着	1	4	2
血漿交換	3	3	4
二重濾過血漿交換	3	6	1
血液吸着	0	1	0
白血球除去	3	2	2

*急性血液浄化療法施行件数に関しては各科管理の症例を含む

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
手術件数	90	90	100
血液透析アクセス	83	85	96
腹膜透析アクセス	7	5	4

腎生検	37	37	36

腎臓病教室	12	12	12

CKD 紹介（透析を除く）	238	218	280

３　来年度の課題

（１）富士市 CKD ネットワーク、富士市糖尿病ネットワークと連携し、糖尿病性腎症重症化予防対策を推進する。

（２）富士市透析防災ネットワークの活動に協力し、災害時にも透析医療を維持できる体制を整備する。

（３）臨床研修（基幹型・協力型）、医学生の診療参加型臨床実習の円滑な受け入れと教育体制の整備を図る。

（４）腎臓病療養指導士の育成を推進する。

（文責　笠井　健司）

■神経内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	河野　優		

2　平成 29 年度の診療実績

平成 29 年度は部長と１人の非常勤医師とで外来診療を行った。

外来は、火曜日を除く月から金曜日の週４回、主に紹介制をとり、物忘れ、しびれ、歩行障害など様々な神経症状を主訴とする患者の診断、治療および経過観察を行った。

入院を要する疾患も多く、内科各科からの協力を仰ぎ、内科主治医制、神経内科常勤医が担当医として治療にあたった。病院統計では内科入院患者として統計を取っている。

また、平成 28 年度から日本神経学会・准教育施設の認定を受け、専門医教育施設として活動しており、当院での研修が専門医習得につながることが確保された。

（１）疾患別入院患者数　　（人）

		平成27年度	平成28年度	平成29年度
血管障害	脳梗塞／脊髄梗塞	101	74	122
	脳出血	1	1	1
	一過性脳虚血発作	3	3	3
感染・炎症性疾患	脳炎／脳症	7	6	3
	プリオン病	1	2	1
	髄膜炎	3	10	11
変性疾患	認知症	2	1	1
	パーキンソン病関連疾患	22	7	16
	脊髄小脳変性症	0	1	0
	運動ニューロン病	9	9	4
脱髄性疾患	多発性硬化症／視神経脊髄炎	7	11	7
末梢神経障害	ギランバレー症候群	3	5	2
	慢性炎症性脱髄性多発神経炎	2	0	3
筋疾患	筋炎	3	0	4
	重症筋無力症	1	1	5
発作性疾患	てんかん／痙攣発作	21	20	22
その他		22	31	26
計		225	208	231

（２）特殊検査実績　　（件）

	脳波	針筋電図	神経伝導検査
外来	96	16	125
入院	126	3	55

（３）臨床調査個人票作成

神経疾患の多くは難病として特定疾患治療研究事業の対象となっており、臨床調査個人票の作成総数は新規・更新を併せて 245 件であった。

３　来年度の課題

（１）常勤医の増員

（２）内科入院主治医との連携徹底

（３）神経診療の啓発、教育

（４）富士市難病団体連絡協議会との交流

（文責　河野　優）

■精神神経科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	外岡　雄二		

2　平成 29 年度の診療実績

平成 27 年度４月より、外来診療を再開している。

（１）外来診察：週４日（午前・午後）　※金曜日は非常勤医師が診療（午前のみ）

【対象疾患】

統合失調症、気分障害（うつ病・躁うつ病他）、神経症（強迫性障害・全般性不安障害・社交不安障害他）、認知症（アルツハイマー型認知症・脳血管性認知症他）、精神遅滞、てんかん、アルコール依存症、症状精神病　など

（２）入院患者診察：毎日

【対象疾患】

当院で入院治療中の精神疾患患者の病状管理、認知症患者のせん妄症状のコントロール、自殺企図後の患者の精神症状のフォロー、アルコール依存症の離脱症状の治療、各種精神症状（不眠･不安･抑うつ･希死念慮）の治療 など

（３）外来の診療統計総計：2,783 人

月別診療数　（人）

年度＼月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
29	222	222	226	239	244	224	215	259	240	239	214	239	2,783
28	188	174	203	196	215	218	214	221	222	214	206	253	2,524
27	52	90	108	132	146	140	151	154	163	177	181	207	1,701

3　来年度の課題

当院には精神科の入院病床がないため、入院治療が必要な精神疾患患者の治療については対応ができない。また、常勤医師が１名であるため、夜間･休日での診療・対応が困難である。今年度も引き続き、市内の精神病院との連携をより密にして、対応困難な患者の入院治療への対処をスムーズに行えるようにしていく方針である。

（文責　外岡　雄二）

■循環器内科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事	三川　秀文	部長	阪本　宏志
医長	山田　崇之	医長	木下　浩司
医長	長谷川　潤	専任医師	蒔田　憲太朗

2　平成 29 年度の診療実績

富士地区の循環器疾患の救急医療を、心臓血管外科と協力し 365 日体制で当直を配し、看護師、放射線技師、臨床工学技士、臨床検査技師とともにチーム医療で日夜取り組んでいる。今年度は急性冠症候群に対し緊急冠動脈造影検査を 229 例に施行し、うち 177 例に対して経皮的冠動脈インターベンションを施行している。また、心肺停止や心原性ショック例に対しても経皮的心肺補助法（PCPS）や大動脈バルーンパンピング法（IABP）などの機械的補助装置を用いて積極的に救命に努力している。

検査では心臓超音波検査にて非侵襲的に弁膜症や心機能の評価ができ、多列型Ｘ線 CT 装置(MDCT：256 スライス）および核医学検査などで冠動脈疾患を診断することが可能である。冠動脈疾患の治療には多枝病変を有する症例も多く、血管内超音波法（IVUS)、光干渉断層法（OCT)、冠血流予備量比（FFR）等の画像診断を用いて、病変の形態や組織性状の把握、虚血の有無等を評価し治療に取り組んでいる。

末梢動脈疾患の治療も積極的に行い、総腸骨動脈、大腿動脈、膝窩動脈以下など 41 例にバルーン拡張やステントを用いた血行再建術を施行した。

日本循環器学会認定循環器専門医研修施設、日本心血管インターベンション治療学会研修施設に認定されており、循環器専門医４名、日本心血管インターベンション治療学会認定医２名、専門医・指導医１名を有し、学会発表も積極的に行っている。教育面では他施設から医師を招き、知識および技術の向上に努めている。

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
冠動脈造影	961	1,033	1,038
冠動脈インターベンション例	375	399	482
緊急症例（治療）	170（132）	189（142）	229（177）
末梢動脈疾患（腎動脈疾患）	29（3）	46（0）	41（0）
ペースメーカー植え込み術	52	53	70

3　来年度の課題

循環器内科では薬剤難治性心不全（基礎疾患は陳旧性心筋梗塞、弁膜症、心房細動、拡張型心筋症等）で入退院を繰り返す症例が増加してきた。不整脈の治療としてのアブレーション、植込み型徐細動器（ICD）とともに難治性心不全治療の心臓再同期療法（CRT）等を実施することで、循環器領域で、より積極的な治療が期待できるため、医師の増員、特に不整脈の医師の派遣を働きかけていきたいと思っている。

（文責　阪本　宏志）

■心臓血管外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	織井　恒安（～12 月）	部長	田口　真吾（１月～）
副部長	木ノ内　勝士		

2　平成 29 年度の診療実績

当院の心臓血管外科は平成５年４月の開設以来、虚血性心疾患（狭心症、心筋梗塞）、弁膜症、不整脈手術、大動脈疾患（胸部から腹部）、末梢血管疾患（慢性閉塞性動脈硬化症、急性動脈閉塞症）に代表される成人疾患を一貫して扱っている。

平成 29 年３月までは常勤医師は織井部長１名のみであったが、平成 29 年４月からは、東京慈恵会医科大学から更に１名常勤医師として、木ノ内医師が副部長職で赴任した。また、平成 29 年度は、人事異動に伴い、部長職医師の交代もあったが、常勤医師２名の診療体制を継続できた。

心血管系に対する手術という当科の診療内容からすれば常勤医師２名では未だ不十分ではあるが、手術日は指導教授を含め東京慈恵会医科大学から医師２名が派遣されることで、手術を含めた日々の診療を滞りなく行っている。

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
虚血性心疾患	10	12	10
弁膜症	17	24	25
不整脈	2	3	2
胸部大動脈	2	4	11
胸腹部大動脈	0	2	3
先天性心疾患	0	0	0
腹部大動脈	8	11	17
末梢血管	19	27	19
心臓腫瘍、他	1	2	0
計（重複症例あり）	59	85	87

3　来年度の課題

来年度も含めた中期的な課題であるが、常勤医師が２名のため緊急手術に対する対応力が不十分ではあるものの、病棟業務や当直を合同で行っている循環器内科医の尽力を中心に、心臓手術周術期管理に携わる各部門担当者（麻酔科医、ICU・手術室・病棟看護師、薬剤師、臨床工学技士、リハビリテーション科等）とカンファ

レンスや勉強会を行うことで、大動脈解離等の緊急手術症例への対応も徐々に可能となってきている。実際に平成 29 年度は院内発症ではあるが、大動脈解離症例を緊急手術にて救命することができ、当科は勿論のこと事、関係したコメディカル全ての自信に繋がったと思っている。

心臓血管外科に限らず、最近は全ての外科系医局で若手医師の入局数が減少している状況が全国的な風潮であり、大学医局から当院にもう１名心臓血管外科常勤医師を派遣することは現状では困難であるが、当院がカバーする富士市を中心とした人口（30 万人前後）を考慮すれば、心血管系の手術は現在の３倍・年間 200～300 症例行うことは可能である。時間はかかると思うが、予定手術の増加以外にも徐々に緊急手術を行うことで実績を作り、24 時間・365 日手術を行える環境を整えることで、常勤医師の増員を大学医局に働きかけ、更なる症例数の増加に繋がる正のサイクルとなるよう努めていきたい。

（文責　田口　真吾）

■小児科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
嘱託診療参事	千葉　博胤	副部長	秋山　直枝
医長	松岡　諒	医長	木下　美沙子
医長	鈴木　貴之（～１月）	医長	鈴木　亮平
医員	岡井　真史（～３月）	医員	角皆　季樹（２月～）
専任医師	村木　國夫（～１月）	専任医師	白坂　和美（～３月）
専任医師	竹内　博一（２月～）		

2　平成 29 年度の診療実績

基幹病院の小児科として、一般小児科診療、小児救急、新生児医療を地域で開業されている先生方、富士市救急医療センターと連携し、24 時間体制で小児患者の受け入れを行っている。また、静岡県立こども病院とも連携している。

平成 29 年度の退院数は、全体で 907 件と減少を認めたが、平成 26 年７月から認可されている NICU（新生児特定集中治療室）の入院数は、本年度 397 症例で小児科全体に占める割合が、年々増加している。

４月に松岡医師の赴任後、小児消化器内視鏡検査が行えるようになり、実績は消化器内視鏡検査　延べ 34 件（21 人）（上部消化器内視鏡検査　16 件、大腸内視鏡検査　10 件、小腸カプセル内視鏡検査　２件、超音波内視鏡検査　１件）であった。

食物アレルギーに対しての食物経口負荷試験も引き続き行なっている。

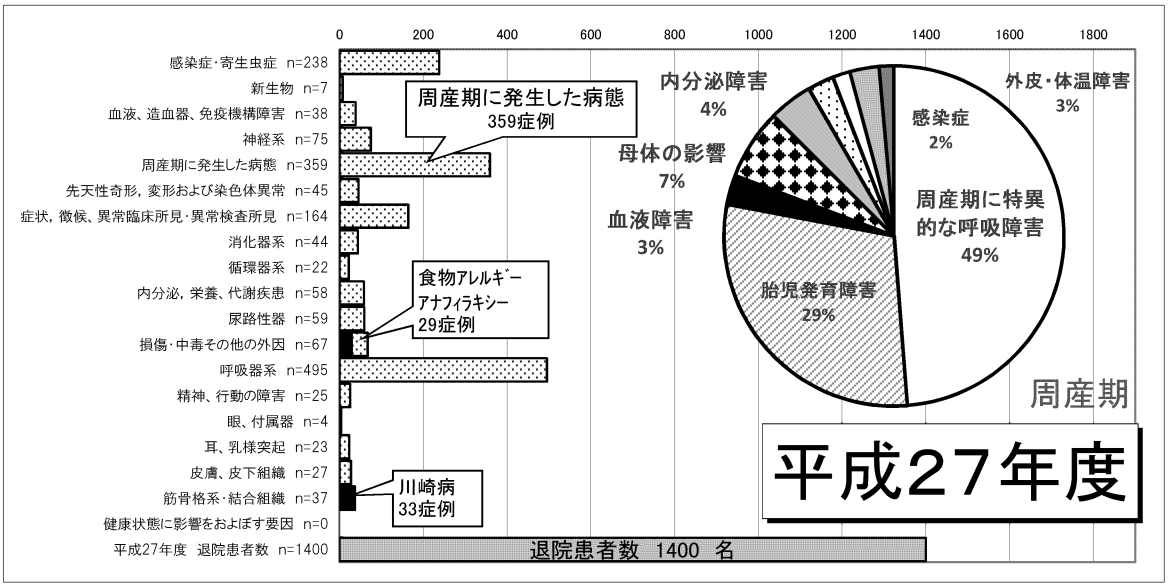
平成 28 年９月より始まった診療参加型臨床実習として、東京慈恵会医科大学５～６年生の受け入れを行っており、４週間毎、１名ずつ配属された。

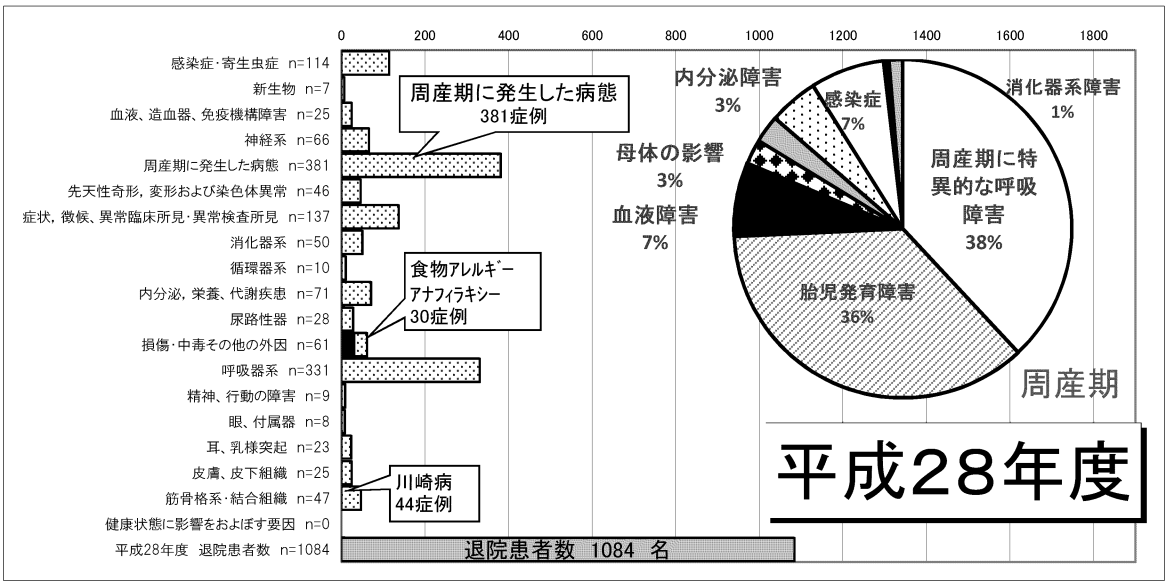
週１回の重症患者への対応シミュレーション、病棟での勉強会を頻回に行うとともに、学会発表や論文投稿など、医療全体への貢献も積極的に行なっている。

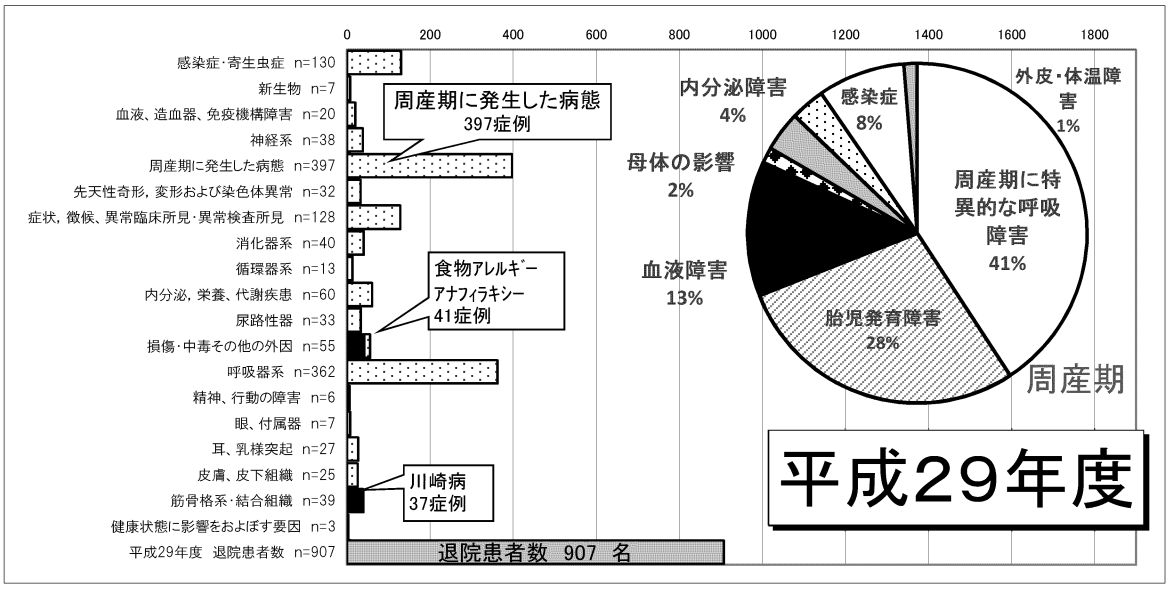
3　来年度の課題

地域医療機関、静岡県立こども病院と蜜に連携をとり、プライマリ・ケアから専門的医療まで包括的で質の高い小児医療を提供することを目指していきたい。

（文責　秋山　直枝）


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=238
新生物 n=7
血液、造血器、免疫機構障害 n=38
神経系 n=75
周産期に発生した病態 n=359
先天性奇形，変形および染色体異常 n=45
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=164
消化器系 n=44
循環器系 n=22
内分泌，栄養、代謝疾患 n=58
尿路性器 n=59
損傷・中毒その他の外因 n=67
呼吸器系 n=495
精神、行動の障害 n=25
眼、付属器 n=4
耳、乳様突起 n=23
皮膚、皮下組織 n=27
筋骨格系・結合組織 n=37
健康状態に影響をおよぼす要因 n=0
平成27年度 退院患者数 n=1400
周産期に発生した病態
359症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
29症例
川崎病
33症例
内分泌障害
4%
母体の影響
7%
血液障害
3%
外皮・体温障害
3%
感染症
2%
周産期に特異的な呼吸障害
49%
胎児発育障害
29%
周産期
平成27年度
退院患者数 1400 名


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=114
新生物 n=7
血液、造血器、免疫機構障害 n=25
神経系 n=66
周産期に発生した病態 n=381
先天性奇形，変形および染色体異常 n=46
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=137
消化器系 n=50
循環器系 n=10
内分泌，栄養、代謝疾患 n=71
尿路性器 n=28
損傷・中毒その他の外因 n=61
呼吸器系 n=331
精神、行動の障害 n=9
眼、付属器 n=8
耳、乳様突起 n=23
皮膚、皮下組織 n=25
筋骨格系・結合組織 n=47
健康状態に影響をおよぼす要因 n=0
平成28年度 退院患者数 n=1084
周産期に発生した病態
381症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
30症例
川崎病
44症例
内分泌障害
3%
母体の影響
3%
血液障害
7%
感染症
7%
消化器系障害
1%
周産期に特異的な呼吸障害
38%
胎児発育障害
36%
周産期
平成28年度
退院患者数 1084 名


0 200 400 600 800 1000 1200 1400 1600 1800
感染症・寄生虫症 n=130
新生物 n=7
血液、造血器、免疫機構障害 n=20
神経系 n=38
周産期に発生した病態 n=397
先天性奇形，変形および染色体異常 n=32
症状，徴候、異常臨床所見・異常検査所見 n=128
消化器系 n=40
循環器系 n=13
内分泌，栄養、代謝疾患 n=60
尿路性器 n=33
損傷・中毒その他の外因 n=55
呼吸器系 n=362
精神、行動の障害 n=6
眼、付属器 n=7
耳、乳様突起 n=27
皮膚、皮下組織 n=25
筋骨格系・結合組織 n=39
健康状態に影響をおよぼす要因 n=3
平成29年度 退院患者数 n=907
周産期に発生した病態
397症例
食物アレルギー
アナフィラキシー
41症例
川崎病
37症例
内分泌障害
4%
母体の影響
2%
血液障害
13%
感染症
8%
外皮・体温障害
1%
周産期に特異的な呼吸障害
41%
胎児発育障害
28%
周産期
平成29年度
退院患者数 907 名

■外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
院長	柏木　秀幸	部長	梶本　徹也
副部長	吉田　清哉	副部長	良元　和久
副部長	坪井　一人	副部長	道躰　隆行
医長	髙野　裕樹（７月～）	医長	谷田部　沙織(～12 月)
医長	阿部　恭平（～６月）	専任医師	市原　恒平
専任医師	石川　あい（～６月）	医員	小林　康伸（～６月）
専任医師	中野　貴文（７月～）	専任医師	村上　友梨（７月～）

2　平成 29 年度の診療実績

食道手術（食道アカラシア、逆流性食道炎、食道がんなど）６件、スリーブ状胃切除術（減量手術）34 件、胃十二指腸良性疾患手術 20 件、胃がん手術 49 件、小腸手術（腸閉塞や悪性疾患など）35 件、虫垂切除術 55 件、大腸手術 120 件、肛門手術（痔疾患など）18 件、人工肛門手術 22 件、そけい・腹壁ヘルニア手術 99 件、胆石症手術 109 件、肝臓・胆道がん手術 30 件、膵臓がん手術 20 件、乳がん手術 48 件、呼吸器手術 15 件

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
上部消化管	78	99	106
下部消化管	266	262	236
肝胆膵	127	116	160
ヘルニア	143	110	98
呼吸器	34	14	14
乳腺	48	55	55
手術総数（鏡視下手術）	765(245)	796(284)	831(303)

3　来年度の課題

平成27年の地域がん診療病院に続き、平成29年８月には地域医療支援病院に承認された当院は、地域医療連携を積極的に活用して、がん診療だけではなく他の分野でも専門性を生かした急性期病院を目指す必要がある。外科の支柱は、消化器（消化管、肝胆膵）外科と乳腺外科であるが、平成29年９月の小児外科外来を開設後、外来患者数は着実に増加し、それに伴い手術件数も増加している。

平成30年５月からは、呼吸器外科外来を開設し、今後は大きな柱になり得る呼吸器外科手術の増加を図っていきたい。

病院収益向上の鍵は手術件数の増加であることが指摘されており、今後は手術室の有効活用のために、外科手術手技の向上を図って手術時間を短縮するとともに、病院に対し鏡視下手術機器の充実を期待する。

（文責　梶本　徹也）

■整形外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療参事	永井　素大	部長	加藤　努
医長	村上　宏史	医員	嶺　崇文（～３月）
専任医師	山口　雅人（～12 月）	専任医師	船井　充（～６月）
専任医師	江﨑　直哉（7～12 月）	専任医師	閨谷　大希（１月～）
専任医師	宮坂　玄樹（１月～）		

2　平成 29 年度の診療実績

富士市の二次救急病院として、多くの外傷患者の診療・治療を行っている。当院が担う医療圏域は二次産業が多いため、一般的な骨折外傷だけでなく、労災や交通外傷での多発性外傷の対応をすることが多い。また、近年の高齢化社会に伴い、合併症を伴う大腿骨頚部骨折などの治療も多く行った。年間手術件数は約 600 件であり、変形性関節症疾患での人工関節手術は、年間 60 件程度で年々増加してきている。平成 28 年度からは、骨バンクの運用が開始されており、難治療症例に対応できるようになった。

	平成27年度	平成28年度	平成29年度
人工関節置換術	40	50	63
大腿骨近位部骨折 （骨接合術・人工骨頭置換術）	254	223	224
その他	309	328	248
合計手術件数	603	587	535

3　来年度の課題

依然として富士宮地域の整形外科領域における診療機能低下が続いており、同地域からの患者受け入れに関する問い合わせが多数寄せられる。病床利用数の高い状態が慢性化しているが、富士地域の手術患者の受け入れをスムーズに行えるよう体制を整えていきたい。

当院の特徴となる人工股関節手術をアピールし、手術件数・実績の向上を目指し、結果として富士市の基幹病院にふさわしい質の高い医療を提供できるよう、努力する所存である。

（文責　加藤　努）

■形成外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	平川　正彦（～６月）	医長	西村　礼司
専任医師	仲　謙		

2　平成 29 年度の診察実績

平成 29 年度の診療実績は下記のとおりである。（参考：平成 27・28 年度併記）

	入院手術			外来手術			合　計		
	H27	H28	H29	H27	H28	H29	H27	H28	H29
外傷	107	84	128	85	137	132	200	221	260
先天異常	6	11	13	1	4	4	7	15	17
腫瘍	47	65	55	229	241	200	276	306	255
瘢痕、ケロイド	3	4	5	11	21	5	14	25	10
難治性潰瘍	4	5	4	0	0	0	4	5	4
炎症、変性疾患	26	24	14	54	92	73	80	116	87
計	193	193	219	380	495	414	581	688	633

3　来年度の課題

（1）平成 30 年４月より、スタッフ１名の増員が実現することにより、３名体制での診療に戻る予定である。それを有効に活用できるよう工夫していく。

（2）これまで同様、手外科中心に救急にも積極的に対応していきたいと考えている。

（文責　西村　礼司）

■脳神経外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	諸岡　暁	副部長	野田　靖人
医長	武井　淳	専任医師	廣津　竜也

2　平成 29 年度の診療実績

入院疾患の割合および手術数は表の通り。

（１）入院疾患別割合(%)

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
くも膜下出血	7	7	4
脳出血	13	19	17
脳梗塞	15	17	16
頭部外傷	39	38	39
腫瘍	4	5	7
脊椎	0	3	2
血管内治療関連	6	5	7
その他	16	6	8

（２）手術件数

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
頭部手術	123	151	167
①開頭手術	44	37	68
②神経内視鏡手術	1	2	7
③脳血管内手術	26	25	26
脊椎手術	1	9	15

脳卒中入院の割合は安定。引き続き地域連携パスによりリハビリテーション転院は順調である。

脳腫瘍の紹介症例が増加して手術も増えた。悪性腫瘍の化学療法症例が続いている。

手術総数は増加傾向。開頭による手術が増えている。

脊椎手術も増えたが、需要はまだまだ多い。

脳血管内治療は横這い。緊急治療に対応できている。

３　来年度の課題

・救急症例は引き続き全例受け入れの方針。

・脳卒中地域連携パスを上手に使ってベッドの有効利用を図る。

・手術数は 200 件超を目標とする。

・血管内治療専門医および脊椎手術専門医の常勤を東京慈恵会医科大学教室へ要請していく。

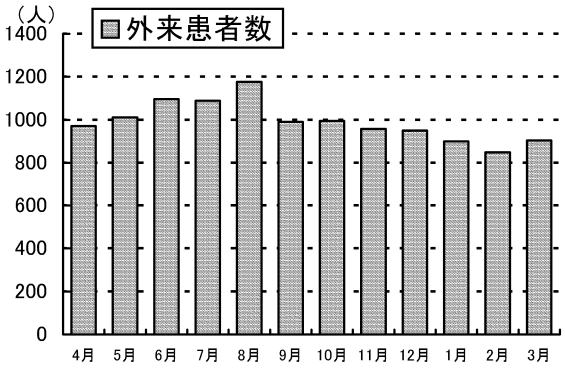
（文責　諸岡　暁）

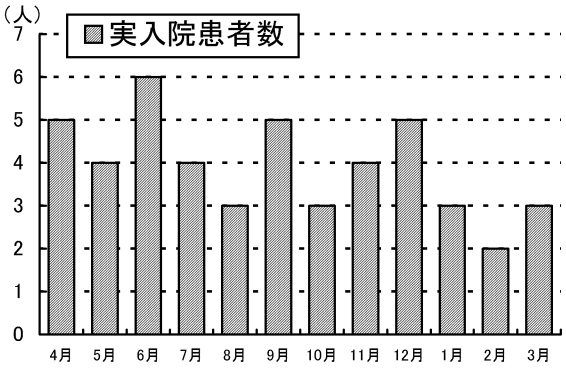
■皮膚科

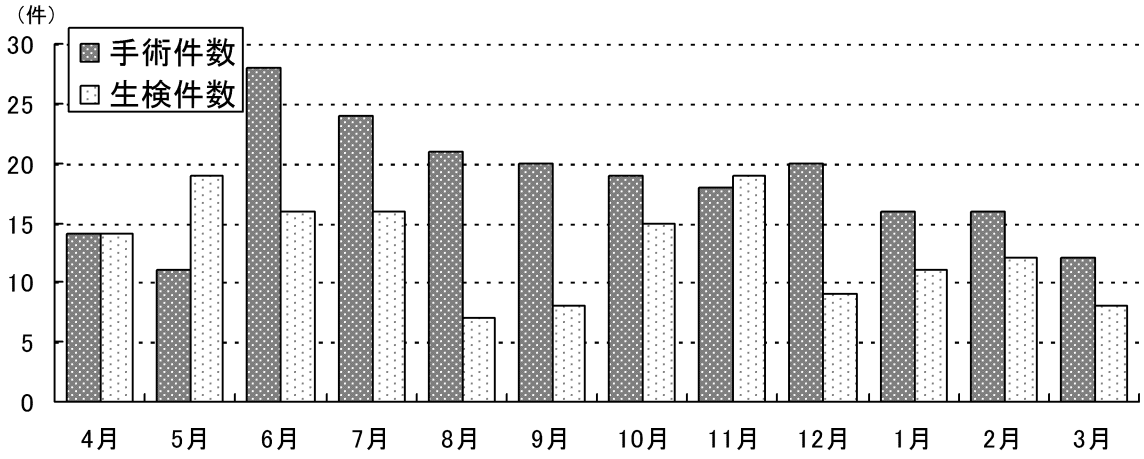
1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	津嶋　友央	医長	森　ナオミ

2　平成 29 年度の診療実績







	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
外来患者数	11, 737	12, 127	11, 891
実入院患者数	43	30	47
手術件数	228	252	219
皮膚生検件数	131	134	154

3　来年度の課題

入院適応のある症例は、患者の症状に合わせて入院治療を進め、より質の高い医療を提供する。

（文責　津嶋　友央）

■泌尿器科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	後藤　博一	副部長	鈴木　英訓
副部長	下村　達也	専任医師	倉内　崇史（～６月）
専任医師	阪中　啓吾（７月～）		

2　平成 29 年度の診療実績

平成 29 年３月の小野寺昭一院長退任後、平成 29 年度は常勤医４人と非常勤２人で診療を行った。悪性疾患、尿路結石、尿路感染症など泌尿器科領域全般の疾患に対し、初期治療から緩和医療、終末期治療まで一貫した診療を行い、入院診療・手術施行可能な地域中核病院の泌尿器科として、24 時間体制で診療を行っている。診療は一次、二次だけでなく、場合によっては三次診療まで行っている。

また、平成 29 年４月以降、富士宮地区の泌尿器科領域の医師減少に伴い、富士宮地区の二次診療や三次診療をも担っている。平成 28 年度から開始した腹腔鏡手術の件数も順調に増加し、今年度は腹腔鏡下腎・尿管悪性腫瘍手術を 33 例問題なく施行した。進行性の尿路上皮癌や去勢抵抗性前立腺癌に対しては、通院化学療法や新規治療薬を積極的に導入し治療を行っている。泌尿器科女性専門外来も、非常勤の女性医師が引き続き担当し、順調に診療が行われた。

主な手術の年次推移

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
経尿道的前立腺切除術	36	32	41
経尿道的膀胱腫瘍切除術	130	150	188
腎悪性腫瘍手術	10	26	33
膀胱結石・異物摘出術	23	18	5
経皮的腎婁造設術	8	13	7
体外衝撃波結石破砕術	536	531	532
年間手術件数（ESWL 除く）	275	317	315

3　来年度の課題

平成 30 年７月からは、東京慈恵会医科大学より医師１名の派遣が予定されており、外来診療での患者待ち時間などの更なる改善を図る予定である。また、手術枠も増枠となるため、手術件数を今まで以上に増加させ、症例数を増やし、前立腺全摘術は腹腔鏡下手術も導入する予定である。また、その他の医療機器や診療システム、地域連携の充実を図り、一貫した結石治療や担癌患者に対する治療を行っていきたい。

（文責　後藤　博一）

■産婦人科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	鈴木　康之	医長	長谷川　瑛
医長	矢田　大輔	医長	小田　彩子
医員	松木　翔太郎	専任医師	東堂　祐介（～12 月）
専任医師	鈴木　崇公	専任医師	佐藤　あずさ（1 月～）

2　平成 29 年度の診療実績

平成 29 年度のスタッフは、４月に小田彩子が入職、12 月に東堂祐介が異動、１月に佐藤あずさが入職した。当科は地域周産期母子センターとして、富士市は無論、富士宮や山梨の境南地域にかけての周産期医療の一翼をも担っている。当地域の周産期医療が成り立つには小児科医師のサポートが欠かせない。産婦人科と小児科の両輪が円滑に回るように、当科および小児科スタッフが毎週一同に遇して、周産期カンファレンスを行い、情報を共有し、また顔の見える間柄の構築に努めている。また、搬送や母体や胎児の急変を認める際は、速やかに“ほう（報告）れん（連絡）そう（相談）の精神”をモットーに活動している。院内のサポート体制が確立されており、安心して母体や胎児の管理にあたることができ、お母さん、赤ちゃん、そして二人を取り巻く家族のために日々奮闘している。富士医療圏だけでなく、現在、県内の多くの地域で分娩数は減少傾向にあるが、ハイリスク妊娠数に大きな変化はなく、分娩に占める割合は自然と増加している。妊産婦の高齢化が言われて久しいが、当院で分娩された平成 28 年の妊婦の平均年齢は 31.5 歳、平成 29 年は 31.7 歳であった。

婦人科疾患では、良性手術における腹腔鏡手術の件数が更に増加した。年々、技術の向上が進んでいる表れと感じる。若手医師の机の上にはドライボックスと称する結紮や運針を行う透明な箱が置かれており、日々技術を高める努力を行っている。今後も安全に十分留意して研鑽を積む所存である。悪性腫瘍手術件数は、近隣に日本有数の婦人科腫瘍治療施設である静岡がんセンターがあるにも関わらず、数年来一定のニーズがあり、それに応えるべく、病気だけでなく、患者の背景や社会環境を鑑みた医療を提供できるよう努力している。

生殖医療に関しては、公立病院でありながらも体外受精などの高度生殖医療も対応できるフットワークを生かして、体外受精の数や胚移植の数が増加した。看護師、培養士をはじめとするコ・メディカルの協力あっての結果と考える。

女性外来では、現状主に不妊症を扱っているが、女性のヘルスケアとして女性特有の症状（月経困難症、更年期障害、排尿障害など）に対し、患者のニーズに沿ったものを提供していきたい。

主な診療実績

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
分娩件数	698	679	554
母体搬送受入数	89	89	63
帝王切開件数	201	169	129
ハイリスク分娩（保険算定件数）	139	133	123
内視鏡下（腹腔鏡下および子宮鏡下）手術数	175	193	220
良性疾患（開腹及び膣式）手術数	151	152	188
悪性腫瘍手術数	22	23	27
総手術数	549	537	564

生殖補助医療

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
人工授精件数	106	102	92
体外受精件数	81	98	107
融解胚移植件数	107	160	172

3　来年度の課題

分娩数の減少は昨今全国的に指摘されており、当地域もその波が露になってきたと考える。地域周産期母子センターとして、ハイリスク妊婦や搬送もしくは急変した妊婦に対し、安全安楽な医療を提供できるように日々研鑽を積み、また学会活動に積極的に参加して最新の知見を吸収し、実臨床に還元できるよう邁進する。

また、周産期チームとして、小児科医師、看護師、その他のスタッフとの連携を今後も大事にしていく。

婦人科手術は内視鏡手術が増えているが、なによりも“患者さんのため、安全に”をモットーに今後も行っていく。悪性腫瘍に関しては、昨今県立がんセンターのカンファレンス、手術見学に若手医師が参加しているが、地域がん診療病院とし手術だけでなく、緩和医療にも力を入れ、全人的な医療を提供できる努力していく所存である。

（文責　土井　貴之）

■眼科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	藤谷　暢子	医長	渡辺　勝

2　平成 29 年度の診療実績

外来診療は、眼科医２名、視能訓練士３名、看護師２名、医療補助１名、受付１名で行った。

ブドウ膜炎に対する自己注射の指導や、通常以上に点眼処方を希望される患者さんに、看護師が点眼指導も行う等、きめ細かい対応を行っている。

基本的に、月・火・水・金曜日は２診、木曜日は１診であった。４月から、月１回第４木曜日だけ、２診で行った。

午前中は、紹介予約枠を使った紹介初診を最優先とし、９時から予約診察を行っている。予約外や初診も 11 時までの受付で診察可能である。午後は完全予約検査であり、視野検査、眼位検査、レーザー、蛍光眼底撮影、抗 VEGF 薬硝子体注射、ボツリヌス毒素製剤注射、涙点プラグ・鼻涙管シリコンチューブ挿入・霰粒腫・治療的表層角膜切除等の外来小手術、小児の弱視・斜視外来を行っている。

平成 24 年から開始したロービジョン外来も継続している。月１回予約制で、補助具を合わせ、日常生活のアドバイスを行っている。iPad によるロービジョンケアも取り入れており、他院からのロービジョン外来のみのご紹介にも対応している。

また、平成 26 年から始めたオルソケラトロジーも行っている。まだ処方数は少ないが、病院ウェブサイトを見て、遠方から受診していただくこともあり、今後も継続していく。

山梨大学眼科から飯島裕幸教授にお越しいただき、診察していただく教授外来も継続している。今後も、２ヶ月に１回、難症例を診ていただくことで、患者さんのためだけでなく、我々の診療技術の向上にもなると考えている。

手術室での手術は、月曜午後と火曜午後に行っている。白内障を中心に、緑内障、網膜剥離、翼状片、斜視、眼瞼内反症など行っている。

白内障手術は、片眼２泊３日入院と日帰り手術を選択していただき、行っている。様々な理由で入院することが難しい患者さんのニーズに応えたもので、徐々に日帰り手術件数が増え、結果的に手術総件数が上がっている。認知症や精神発達遅滞等のために全身麻酔で行う症例も受け入れており、その場合、入院は４日となる。

硝子体手術については、月１回、山梨大学から専門医を招き、少数ながら万全の体制で行っている。

手術室での眼科手術

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
白内障手術	198	232	253
緑内障手術	9	12	23
硝子体手術	24	16	22
網膜剥離手術	1	2	2
強角膜縫合術	0	0	0
翼状片手術	4	5	1
斜視手術	0	1	4
眼瞼内反症手術	4	4	2
その他	5	2	2
計	245	271	309

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
抗 VEGF 硝子体注射	191	173	200

3　来年度の課題

手術については、近隣に手術を行う眼科クリニックが多く、当科で行うものは全身状態も目も難しい症例の比率が高い。そのため、限られた時間枠で手術件数を大幅に増やすことは難しいが、昨年度より更に手術症例の増加を目指す。

緑内障手術については、近年 MIGS という新しい術式が広まりつつあり、スーチャーロトミーや眼内法の線維柱帯切開術等は既に当科でも導入し、結果として緑内障手術件数が増えてきている。iStent の導入も適切に行えるよう準備が整った。今後の経過次第で、積極的に進めていく。

当科の位置付けとしては、他院・他科との連携である。開業医の先生との連携をもっと密にするよう工夫したい。他科とも積極的にコミュニケーションを取り、多方向からの加療を目指す。

また、ロービジョンケアは、患者さんが諦める前の働きかけが大事である。早めから患者さんのニーズを掘り起こし、残された機能を最大限使えるよう、お手伝いしていきたい。

オルソケラトロジーも症例数を増やしていきたい。また、多焦点眼内レンズといった過去に行ってこなかった治療も、今後行うべく環境を整備していく。

（文責　藤谷　暢子）

■耳鼻咽喉科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	重田　泰史	医長	高津　南美子
医員	内尾　紀彦	医員	黒田　健斗

2　平成 29 年度の診療実績

耳鼻咽喉科は３人体制で診療を行っていたが、平成 29 年度は４人体制となり、耳、鼻、咽喉頭、頸部の診断・治療を幅広く行っている。午前中は一般外来を行い、特別な治療や処置が必要となる患者さんは午後に来院していただき治療、処置を行っている。手術日は火・水・金の週３日間で、高度な技術を必要とする手術は東京慈恵会医科大学の医師を招聘し行っている。進行癌症例は静岡県立静岡がんセンターと連携している。また当科の特色として嚥下障害患者に対する診断・治療を積極的に行い、院内の絶食患者さんのより安全な経口摂取の再開を目指している。

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
嚥下機能評価患者	148	107	52
内視鏡下鼻内副鼻腔手術	145	116	110
鼻中隔矯正術	72	76	47
口蓋扁桃摘出術	54	136	65

3　来年度の課題

平成 30 年度からは元の３人体制に戻る予定であるが、得意分野である内視鏡下鼻内副鼻腔手術を柱として、手術症例数を増やすことができるよう努力したいと考えている。

耳鼻咽喉科での嚥下機能評価患者は減少しているが、ST も含めた嚥下機能評価患者は増加しており、院内全体としての嚥下機能評価患者数は増加している。引き続き ST と連携して嚥下機能評価を行っていきたい。

（文責　重田　泰史）

■放射線科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
医長	道本　顕吉		

2　平成 29 年度の診療実績

引き続き、CT、MRI、RI、超音波に関して可及的迅速に全件読影を行っており、これらの検査件数は右肩上がりの状況が続いているが、画像診断管理加算２（CT/MR/RI の８割以上の読影結果が、常勤専門医により撮影日の翌診療日までに主治医に報告される事を条件に、１件ごとに 180 点算定される）の算定施設基準を維持することができた。

IVR に関しても幅広い処置を施行しており、近年注目度の高い運動器慢性疼痛に対するカテーテル治療も開始予定である。

IVR 部門

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
合計	136	158	190
Vascular IVR	73	115	119
肝癌の化学塞栓･動注療法（TACE/TAI）	20	36	39
肝切除術前の経皮経肝的門脈塞栓（PTPE）	0	3	1
胃静脈瘤の塞栓（BRTO/PTO）	5	1	2
喀血に対する気管支動脈塞栓（BAE）	1	6	6
透析シャントの血管形成術（PTA）	1	2	7
静脈サンプリング（副腎、膵臓、下垂体など）	1	5	1
PICC Line 挿入	21	22	26
緊急止血術	17	24	25
動脈瘤、血管奇形、その他	7	16	12
Non-vascular IVR	58	43	71
経皮的生検	6	0	25
膿瘍に対する経皮的ドレナージ	30	25	30
胆道系	17	7	6
血管腫に対する硬化療法	5	9	6
その他	0	2	4

読影部門

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
総読影件数	32,007	34,817	35,639
CT	18,687	20,683	21,493
MRI	5,312	5,563	5,824
US	7,072	7,594	7,407
アイソトープ	936	977	915

病診連携件数

	平成 27 度	平成 28 年度	平成 29 年度
高度医療機器利用依頼	1,709	1,839	1,863

放射線治療人数

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
患者数	144	145	146
頭頸部	2	9	5
胸部	39	65	61
腹部	4	12	10
骨盤	28	26	29
骨軟部	66	25	41

３　来年度の課題

・他科との連携をさらに密にしていく。

・IVR 業務の拡充

・読影管理加算２の算定施設基準を維持する。

・病診連携（高度医療機器利用依頼）にさらに力を入れ、逆紹介率向上に貢献する。

（文責　道本　顕吉）

■麻酔科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	井上　恒佳	副部長	大谷　法理
医長	影山　佳世		

2　平成 29 年度の診療実績

過去３年間の麻酔科管理手術症例の推移は下表のとおりである。

本年度より、本格的に新体制での麻酔科運用を開始した。また、手術室運営において何点か改善を行った。具体的には、「①各科からの手術枠増加の希望に対応し、手術管理課のもと手術枠の大幅な更新を行った」、「②入室時間等をより弾力的に変更できるようにした」、「③東京慈恵会医科大学から非常勤麻酔科医の派遣数を増やしていただいた」である。

この結果、前年度と比べて麻酔科管理症例数、全身麻酔症例数いずれも大幅に増加することとなった。また件数だけでなく、次の手術までの間隔が短くなるなど、効率的な運用が可能となってきた。

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
麻酔科管理総数	1,582	1,542	1,703
全身麻酔 （他の麻酔法の併用を含む）	1,495	1,499	1,670
硬膜外麻酔・脊椎くも膜下麻酔 （どちらか一方・両者併用を含む）	57	29	26
その他	30	14	12

3　来年度の課題

麻酔科管理症例数および全身麻酔症例数の増加は順調であり、平成 30 年度は、まず同程度の症例数を目標とする。まだ手術枠の運用については改善の余地があると思われるため、手術管理課とともに、引き続き検討・見直しを行っていく。

昨年度からの課題でもあった麻酔の質の向上については、麻酔方法の統一化、積極的な合併症対策などを行い、ある程度の効果は現れてきている。こちらも引き続き継続していく。

（文責　井上　恒佳）

■病理診断科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	遠藤　泰彦		

2　平成 29 年度の診療実績

病理組織診断	5,209 件
（内、術中迅速診断）	156 件
細胞診断	4,840 件
病理解剖	9 件
CPC 開催	年４回
各診療科とのカンファレンス	多数

常勤医師１名、非常勤医師１名、臨床検査技師・細胞検査士６名、医師事務作業補助者１名を含めた構成で業務を行っており、場合によっては東京慈恵会医科大学との連携のもと診断を行うこともある。下表（過去３年の実績）をご覧いただくとわかるが、診断件数は年々明らかに増加してきており、また免疫染色の件数に関しても明らかな増加が認められる。

※ 過去３年間の診断件数

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
組織診断 （内、術中迅速診断）	4,679 (114)	5,116 (138)	5,209 (156)
細胞診断	4,047	4,709	4,840
病理解剖	11	6	9

3　来年度の課題

病理診断は非常に重要な検査で、特に腫瘍で陽性・悪性を決める場合には最終診断となる。このことは、治療方針の決定、治療効果の評価、および予後判定に重要な意味を持っている。病理医は、いつも患者さんとともに病気と健康について考え、最善の医療が提供できるよう心がけている。

（文責　遠藤　泰彦）

■歯科口腔外科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	勝山　直彦	副部長	井出　正俊
医員	久我　憲央		

2　平成 29 年度の診療実績

地域基幹病院の口腔外科として主に難抜歯、外傷、炎症、腫瘍、嚢胞、粘膜疾患、奇形・変形の手術を行っている。当科は、一般開業医では処置困難な症例を扱い、通常の歯科治療は行っていない。

平成 29 年度外来局所麻酔手術は、2,421 例であった。

症例は、難抜歯が最も多く、次いで嚢胞、その他の順である。

手術症例

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
難抜歯	1,792	1,619	1,895
嚢胞	86	88	106
外傷	22	14	21
その他	235	211	399
計	2,135	1,932	2,421

3　来年度の課題

今後、地域基幹病院の口腔外科として地域医療機関と密な連携をはかり手術症例を増やしたいと考えている。平成 29 年度と同様に、顎変形症について、県東部の歯科矯正医との連携をとり症例を増やす予定である。

また、周術期口腔機能管理について、保険適応の拡大もあることから、今後各科と連携し充実を図っていく。

当院は、地域の基幹病院であるため、市民のために質の高い医療を提供できるよう研鑽・努力していきたい。

（文責　勝山　直彦）

■手術管理科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
部長	良元　和久		

2　平成 29 年度の診療実績

手術室の安全性や効率性の向上を目指し、手術室全体の運用や診療部の調整、緊急時の対応ができる管理体制を構築し、規定・マニュアルを作成した。

・手術件数等は手術室運営委員会の「平成 29 年度の取組実績」を参照。
・特殊カンファレンスを行い、安全な手術運営を行った。

特殊カンファレンス開催件数

平成 28 年度	平成 29 年度
3	9

3　来年度の課題

・他診療部、手術室スタッフと協力し、さらなる手術室の効率な運用を目指す。
・手術医療機器の更新等の見直しを行い、適正な機器の選定、管理を行う。
・手術枠を有効に使用するためにアンケートを行い、定期的に見直す。

（文責　良元　和久）

■非常勤医師

（平成 29 年４月１日現在）

所　属	氏　　名	所　属	氏　　名
糖尿病･内分泌･血液内科	谷口　幹太	糖尿病･内分泌･血液内科	比企　能人
糖尿病･内分泌･血液内科	石澤　将	消化器内科	中野　真範
内科（内視鏡）	内山　勇二郎	内科（内視鏡）	加藤　正之
内科（内視鏡）	鳥巣　勇一	内科（膠原病）	野田　健太郎
神経内科	森田　昌代	精神神経科	品川　俊一郎
精神神経科	三宮　正久	心臓血管外科	橋本　和弘
心臓血管外科	中尾　充貴	心臓血管外科	村山　史朗
外科（内視鏡）	宮川　朗	外科（内視鏡）	増田　勝紀
外科（呼吸器）	森川　利昭	小児科（小児発達）	安田　寛二
小児科（小児精神）	東　誠	リハビリテーション科	佐々木　信幸
脳神経外科	坂本　広喜	脳神経外科	秋山　雅彦
泌尿器科	平本　有希子	泌尿器科	阿部　和弘
産婦人科	廣中　由紀	産婦人科	金山　尚裕
放射線科	竹永　晋介	放射線科	大木　一剛
放射線科	和田　紘幸	放射線科	松井　洋
放射線科	成田　賢一	放射線科	榎　啓太朗
放射線科	樋口　陽大	放射線科	五味　拓
放射線科	大内　厚太郎	放射線科	青木　真一
放射線科	小宮山　貴史	麻酔科	篠原　仁
麻酔科	渡邉　薫	麻酔科	阿部　建彦
麻酔科	田川　学	病理科	千葉　諭
歯科口腔外科	磯田　浩太	歯科口腔外科	阿部　恵一
歯科口腔外科	森永　桂輔	歯科口腔外科	岡村　尚
歯科口腔外科	砂田　勝久	歯科口腔外科	小林　清佳
歯科口腔外科	児玉　実穂	歯科口腔外科	岡山　浩美
歯科口腔外科	吉田　和正	歯科口腔外科	猪股　徹

■臨床研修医

氏　　名	採　用　期　間
遠藤　憲彦	平成 28 年４月１日～平成 30 年３月 31 日
大原　祐生	平成 29 年４月１日～平成 31 年３月 31 日
吉田　和博	平成 29 年４月１日～平成 31 年３月 31 日

■臨床検査科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
技師長	石川　隆之	副技師長	鈴木　雅人
参事補兼主任	渡邉　修	参事補兼主任	渡邉　由喜子
参事補兼主任	鈴木　英昭	主任	大芝　孝次
主任	岩崎　佐知子	主任	小野　美代子
主任	長峰　誠一郎	主任	渡邉　広明
主査	野田　文子	主査	遠藤　聡
主査	佐野　僚子	主査	石井　孝良
主査	山本　純子	上席技師	大野　真一
上席技師	手老　真弓	上席技師	阿部　愛
上席技師	尾形　裕以	上席技師	清　亜矢
技師	内野　有子	技師	竹下　翔太
技師	池田　琢	技師	後藤　理紗
技師	外山　卓矢	技師	柏木　里沙子
技師	大野　成美	技師	森田　合莉
技師（R）	加藤　才子	技師（R）	加藤　加代子
技師（R）	左原　泰子	技師（R）	後藤　隆広
技師（R）	宇佐美　由紀子	技師（R）	塩田　幸子
技師（R）	中山　智美	技師（P）	高橋　昌子
医療補助員	芹澤　好子	BML 事務員	原　久美

※（R）は臨時職員、（P）はパート職員

2　平成 29 年度の業務実績

血液検体件数の推移

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
検体総件数	2,381,176	2,635,843	2,625.397
日直・当直検査数	53,775	56,106	57,182
人工受精・体外受精	194	197	184
胚移植融解	107	161	176
妊婦健診（エコー）	2,269	2,289	3,266
輸血総数(単位＋本数)	15,623	18,518	22,329
剖検数	12	6	15
採血患者数	65,593	69,491	68,528

・院内臨床検査基準範囲の一部を日本臨床検査標準協議会より示された共用基準範囲を基に改訂し、全国の医療施設との標準化を行った。
・検査データの質的向上に取組み、臨床検査技師会精度保証施設の認定を更新した。
・安全な輸血治療の推進に取組み、輸血細胞治療学会 I&A 認証施設を更新した。
・診療報酬算定廃止により３月 31 日をもって HPT テスト検査、ZTT 膠質反応検査の測定を終了した。
・日本医師会、静岡県医師会、日本臨床検査技師会主催の精度管理調査に参加した。
・筋電図、誘発電位検査装置を Neuropack X1 に更新し運用を開始した。
・全自動輸血検査装置を BioRad IH-500 に更新し運用を開始した。
・ユニバーサル冷却遠心機を更新し運用を開始した。
・他覚的聴力検査装置エコスクリーンⅡMAAS を増設し運用を開始した。
・夜間休日の検査体制に全自動輸血検査装置を導入し、輸血検査の自動化を行った。

＜各種認定等資格取得者状況＞

名　称	人数	名　称	人数	名称	人数
細胞検査士	６名	認定輸血検査技師	２名	認定血液検査技師	３名
認定一般検査技師	１名	認定超音波検査士	５名	生殖補助医療胚培養士	３名
体外受精コーディネーター	１名	日本糖尿病療養指導士	３名	心臓リハビリテーション指導士	１名
緊急臨床検査士	２名	健康食品管理士	１名	未病専門指導師	１名
認定心電技師	１名	栄養サポートチーム療法士	１名	認定病理検査技師	２名

※平成 29 年度新たに緊急臨床検査士１名、認定超音波検査士１名取得した

３　来年度の課題

・診療部、看護部、診療技術部との密な連携を図り、様々な要望や意見、課題に応えながらチーム医療に貢献したい。
・業務や人員配置の改善を行うと共に、認定専門資格取得に向けて挑戦できるような職場環境作りを心掛け人材育成を目指したい。
・システム、分析装置の整備に努め、迅速で正確な検査結果の報告が行えるよう管理体制を徹底したい。
・精度管理を更に向上させ、信頼される検査データの提供に努めたい。
・診療部と連携し新規検査項目の導入を検討していきたい。

（文責　石川　隆之）

■中央放射線科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
診療技術部長兼技師長	井出　宣孝	副技師長	高木　省一
副技師長	遠藤　佳秀	副技師長	清水　則雄
参事補兼主任	遠藤　一弘	参事補兼主任	杉山　伸一
主任	池谷　幸一	主任	稲垣　伸一
主任	鈴木　和訓	主任	菅原　和仁
主任	鍋島　雄和	主査	井出　敦之
主査	酒井　理香	主査	岡田　和教
主査	澤口　信孝	主査	大森　知恵
主査	猪股　崇亨	上席診療放射線技師	太田原　絢子
上席診療放射線技師	鈴木　浩之	上席診療放射線技師	秋田　真弓
上席診療放射線技師	岡根谷　侑	上席診療放射線技師	神田　直樹
診療放射線技師	増田　裕司	診療放射線技師	湯山　桃子
医療事務員（R）	中村　明日香		

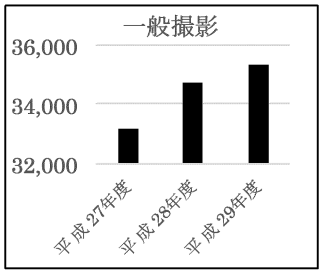
（R）は臨時職員

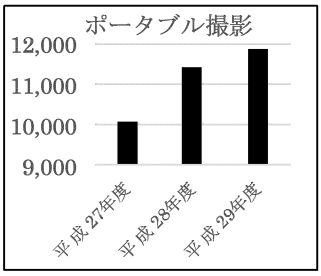
2　平成 29 年度の業務実績　　（人）

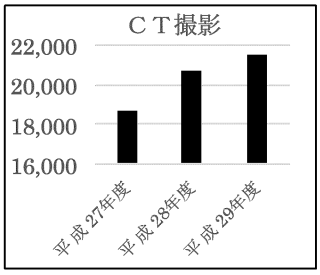
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
一般撮影	33,175	34,747	35,316
乳房撮影	484	494	455
ポータブル撮影	10,045	11,434	11,854
心臓カテーテル検査	1,049	1,154	1,192
その他血管造影	164	200	184
ＣＴ撮影	18,689	20,683	21,493
ＭＲＩ検査	5,312	5,639	5,824
アイソトープ	939	977	915
骨塩定量	249	327	676
TV 撮影	1,009	1,128	1,417
結石破砕	533	536	549
放射線治療	3,514	3,562	3,549
口腔外科撮影	2,507	2,396	2,589

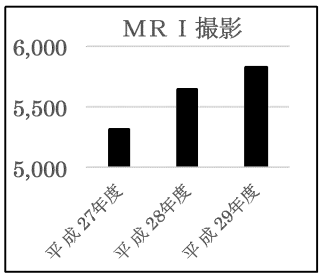
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
超音波検査	7,071	7,594	7,407
画像ファイリング	6,757	7,034	7,235
妊婦検診	2,269	2,290	1,978
病診連携	1,692	1,850	1,904

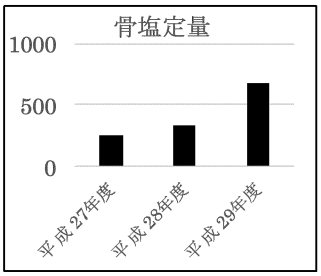
注：本年報の別ページ【９　業務概要(12)放射線撮影件数】は照射件数を記載

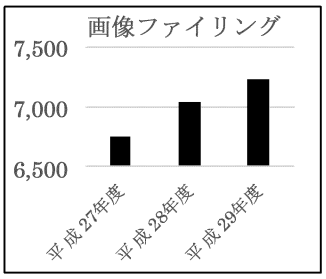












・患者数の増加により一般撮影、ポータブル撮影の増加が見られ５～６年の推移を見ると一般撮影、ポータブル撮影ともに約 3,000 人の増加があった。
病棟や手術室などでの撮影比重がより増加した。
・CT、MRI 撮影も順調に患者数の増加を認めた。６月より MRI 16 室（1.5Ｔ）の更新稼働に伴い MRI 11 室（３Ｔ）と同様のプロトコルが使え、高精細な情報の取得が期待でき、新たにサイレント機能の追加で患者数増加、待ち日数減少など見据え努力していく。
・消化器内科のオーダー増加により骨塩定量が前年比２倍と急激な増加を見た。TV 撮影増加も消化器内科内視鏡検査数の増加による結果であった。
・画像ファイリング、病診連携（高度医療機器利用）の順調な増加が見られた。

３　来年度の課題

当科は更新間近な高額医療機器が複数有るため、計画的な更新ができるよう関係各所に働きかけ、進めていく方針である。
緊急の検査や治療に対応すべく人材の充実を図り体制を一層強化する。

平成 30 年度　中央放射線科目標

「高め合おう　技術と知識と思いやり」

技術の向上と知識の習得を目指し自己研鑽に努め、患者さんの人権を尊重し優しさと思いやりの心を持って安心安全な医療を提供する所存である。

（文責　髙木　省一）

■臨床工学科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
技師長	西田　英明	主査	佐野　達哉
上席臨床工学技士	勝間田　賢	上席臨床工学技士	諏訪部　新
上席臨床工学技士	杉山　弘一	臨床工学技士	佐野　汐里
臨床工学技士	平柳　圭佑		

2　平成 29 年度の業務実績

	手術室業務			心カテ室業務（＊３）	ペースメーカー関連
	臨床業務（＊１）		保守点検業務（＊２）		
	定時	緊急			
27 年度	51	0	447	962	556
28 年度	60	0	480	1,058	702
29 年度	52	5	525	1,108	777

	ME 機器室業務（＊４）			血液浄化療法業務（＊５）
	呼吸器関連	心電図モニター関連	輸液ポンプ・吸引関連	
27 年度	936	29	6,634	71
28 年度	906	35	5,628	100
29 年度	1,006	75	5,467	63

ME 機器　教育研修実績（回数）

	27 年度	28 年度	29 年度
呼吸器・輸液ポンプ・IABP・CHDF 等取り扱い勉強会	28	11	34
手術室 ME 機器勉強会	7	7	2

＊１　主に心臓外科手術人工心肺操作、心臓血管外科・整形外科・脳神経外科などの自己血回収装置操作、PCPS 操作。

＊２　主に麻酔器、気化器、炭酸ガスモニタ、IABP、PCPS、人工心肺装置、血液ガス分析装置、除細動器の保守点検。

＊３　心カテ室業務は総数。ペースメーカー（PM）関連は「PM 外来」、「植え込み術」、「植え込み患者手術立会」、「植え込み後チェック」。

＊４　ME 機器室業務。主に呼吸器組立、心電図モニター、輸液ポンプ類点検。

＊５　主に CHDF、PMX、PE、透析室以外での血液透析。

3　来年度の課題

平成 29 年度に掲げた「未来に向けての人材育成を強化する初年度」から２年目を迎える。当科には、呼吸療法認定士５名、透析技術認定士者４名、体外循環技術認定士２名の認定士取得者が在職しているが、平成 29 年度には、新たに１名が「日本心血管インターベンション治療学会・心血管インターベンション技師」の資格を取得した。平成 30 年度も学会発表及び参加を含め、自己研鑽と切磋琢磨できる臨床工学科としたい。

平成 29 年度より医療機器申請を行っている委員会等のうち、病棟委員会、周産期医療機器安全管理委員会、手術室管理科のヒアリングに各委員長の許可のもと臨床工学科が帯同させていただいた。平成 30 年度は新たに救急室運営委員会の委員に加わり、医療機器の更新計画策定案を委員会に提案していきたい。

「組織を活性化するのは“若手”である」との認識のもと、平成 30 年度も若手からの意見が出やすい雰囲気作りを更にすすめ、病院の発展に寄与できる人材育成を強化していく。

（文責　西田　英明）

■リハビリテーション科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
参事補（作業療法士）	中村　公美	主任（理学療法士）	深澤　史朗
主査（理学療法士）	和泉　裕美子	主査（作業療法士）	竹川　圭亮
上席言語聴覚士	幾嶋　邦人	上席言語聴覚士	石井　玲奈
上席理学療法士	小田　純市	上席言語聴覚士	田中　弘美
理学療法士	山田　将史	理学療法士	加藤　智乃
理学療法士	高橋　良太	理学療法士	若月　優
理学療法士	永嶋　泰玄	理学療法士	梅原　健人
作業療法士	渡邉　亜希子	作業療法士	杉山　かなた
作業療法士	大原　弘樹	作業療法士	中嶋　信夫
作業療法士	佐野　まなみ	言語聴覚士	宮川　真理子
医療補助員（R）	鈴木　千智世		

（R）は臨時職員

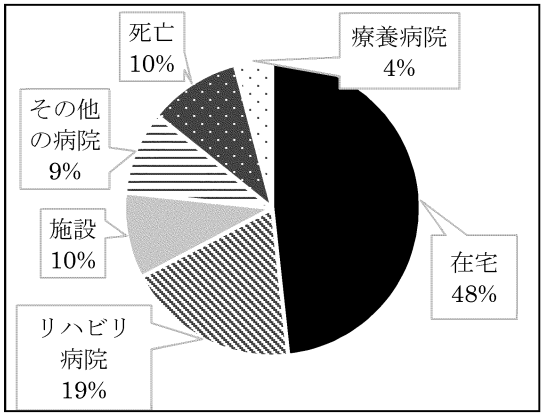
2　平成 29 年度の業務実績

・入院・外来患者に対するリハビリ実施単位数は本年報の別ページ【９　業務概要(28)リハビリテーション実施状況】を参照。

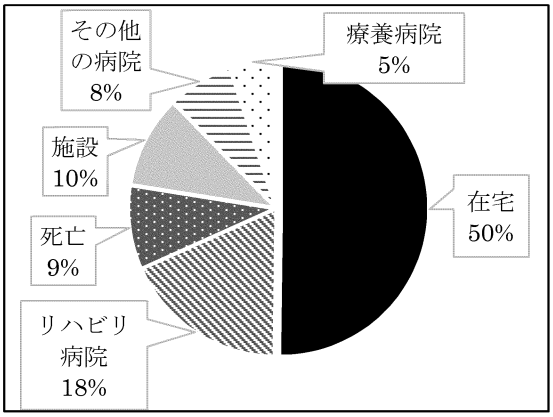
・リハビリ依頼件数は 2,766 件（入院 2,505 件・外来 261 件）で、平成 28 年度より 311 件増加した。【参考：平成 28 年度は 2,455 件、平成 27 年度は 2,198 件】

・リハビリ依頼の約９割を入院患者が占め、入院患者の疾患別割合は、廃用症候群 52%、運動器疾患 28.4%、脳血管疾患 16.3%、呼吸器疾患 3.3%であった。平成 28 年度と比べて、呼吸器疾患以外では依頼件数が増加しているが、廃用症候群の増加が著明なために、脳血管・運動器疾患では処方件数が増加しているにも関わらず、割合としては減少した。

・退院先は平成 28 年度と同様に在宅復帰が全体の半数近くを占め、リハビリ専門病院への転院は全体の約 18.1%であった。



【平成 28 年退院先】



【平成 29 年退院先】

・リハビリ依頼からリハビリ開始までは 0.8 日（平成 28 年度 0.9 日）で、DPC 対象患者のリハビリ介入率は入院患者全体の 22.03%（平成 28 年度 19.65%）、リハビリ開始前後の FIM 改善値は平均 16.6 点（平成 28 年度 19.5 点）だった。リハビリ新規患者数の増加により介入率は増加し、29 年度に５名の人員増加があったために、リハビリ開始までの日数もわずかだが短縮することができた。しかし、リハビリ対象患者の重症化や高齢化により、FIM の改善値は平成 28 年度よりも低かった。
・平成 28 年度の課題であった ICU 入室患者リハビリ提供は、平成 29 年度も目標であった 100%には到達できなかった。
・毎週金曜日のリハビリ回診に PT・OT・ST が各１名ずつ参加したが、平成 29 年度７月からは３Ｃ・３Ｂ病棟においてはリハビリ回診から医師カンファレンスへの参加に変更した。１月からは６Ａ病棟においても医師カンファレンスに参加することに変更した。
・褥瘡・NST（栄養・摂食嚥下口腔ケア）・呼吸器・緩和ケアの回診に参加した。
・適宜、患者・家族・ケアマネージャー等の他スタッフとのカンファレンスを行った。（平成 29 年度で 191 回）
・スタッフ間の治療技術・知識共有を図るためのリハビリテーション科勉強会を月に１回開催し、その他にも研修報告会等を開催した。
・看護学校での講師、市民向けの出前講座（認知症１回・転倒予防２回）を行った。院内においても、病棟・他部門に対して、「トランスファー」「嚥下・摂食リハビリ」の講義を行った。

３．来年度の課題

・平成 29 年度同様に周術期患者・ICU 入室患者へのリハビリ提供の充実を目指していく。
・今までは全疾患別リハ処方に対して同じように充実を図っていたが、平成 30 年度は、「廃用症候群」の患者さんに対しては、患者さんの状態に応じて介入頻度等を調整することで、急性期疾患である「脳血管リハ」「運動器リハ」「呼吸器リハ」への充実を図ることとしたい。
・早期リハビリテーション並びにチーム医療の推進を目指し、「リハビリ依頼からリハビリ開始までの日数は 1.0 日未満を維持」「入院からリハ開始までの日数：6.0 日以内」「リハビリカンファレンス開催日数：年に 150 回」「週に１回のリハビリ回診の開催及び医師カンファレンスへの参加」と目標を定めた。
・各回診への参加・学術研究・勉強会・出前講座等の講師は今までどおり行っていく。

（文責　中村　公美）

■栄養科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
主任（管理栄養士）	小俣　朋子	上席栄養士	古郡　朝子
栄養士	大山　実希	栄養士	望月　唯奈
栄養士（R）	川口　みどり		

※（R）は臨時職員

2　平成 29 年度の業務実績

（1）給食管理業務

・献立作成・発注・検収・材料仕込み・調理・盛り付け・配膳・下膳・食器洗浄の一連の給食管理業務は、平成 10 年４月より全面委託となっている。

・箸・スプーン及びマグカップの配膳に対し、返却数・破損状況の把握として、毎月第２土曜日の昼食後に数量確認・定数管理を行い不足分は補充購入とした。

・献立会議を毎週１回開催し、検食時の所見を考慮した改善策を協議。また嗜好調査を年４回、一般食・常食喫食者を対象に実施。調査結果を踏まえて改善策を講じ、献立には季節感や行事食も取り入れ、よりよい食事提供ができるよう努めた。

・産科食は１日３食、その他一部の食種（一般食・常食、軟飯食、全粥食、高血圧食、塩分６ｇ制限食、学童食、学食）については１日朝・夕２食を毎日選択メニューで対応し、選択メニュー加算（１食 17 円追加）を実施した。

（2）栄養管理業務

・全入院患者の栄養管理状況の把握として、栄養管理計画書の作成が必須となっているため、栄養管理計画書を毎日作成し、年間作成患者数は 24,183 件となった。

・栄養サポートチーム加算の算定は８年が経過しており、当初から NST 専従職員は管理栄養士が担当している。
また、NST 回診、嚥下・口腔ケア回診、褥瘡回診にも参加（回診実績は別紙参照）し、チーム医療の活動を通して多職種との連携を強め、より患者個々に応じた食事内容、栄養計画の作成、栄養評価が可能となった。

・NST 活動を通じて他職種のスタッフとの連携が円滑に行われ、他部門との関わりとしての講師依頼数も増加となった。

・講師依頼としては、緩和ケア担当委員会の院内勉強会、外部の講師依頼では、富士市透析防災講演会・沼津市生活習慣病予防講演会・腎友会東部地区透析食料理講習会でそれぞれ講師を務めた。

・集団栄養指導は、腎臓病教室で「腎臓病と食事」として年２回実施。

・個別栄養指導の業務実績は以下のとおりである。

表）個別栄養指導件数の推移と指導内容の内訳

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
個別栄養指導件数	696	734	747
栄養指導内容　内訳（件数）			
1	糖尿病及び合併症 (264)	糖尿病及び合併症 (279)	糖尿病及び合併症 (218)
2	CKD 及び透析 (100)	CKD 及び透析 (98)	CKD 及び透析 (151)
3	妊娠糖尿病 (66)	妊娠糖尿病 (65)	妊娠糖尿病 (68)
4	嚥下食 (39)	消化管切除術後 (38)	高度肥満症及び肥満症 (58)
5	消化管切除術後 (35)	高度肥満症及び肥満症 (35)	嚥下食 (38)

＊糖尿病及び合併症にはⅠ型糖尿病・糖尿病性腎症も含む。

＊その他として、胆嚢炎・消化管術後・心臓病高血圧症などの件数が多かった。また、小児アレルギー食・低栄養・がんに対する栄養指導件数も上がっていた。

（３）その他の業務

・富士調理技術専門学校より２名、日本短期大学部食物栄養学科より４名、山梨学院大学健康栄養学部より２名、計８名の実習生受入れを実施。

・市立看護専門学校１年生の栄養学（調理実習も含）の講師を担当。

３　来年度の課題

（１）NST を通じて他部門との連携を強化し、病棟訪問も視野に入れ患者個々に応じた栄養管理の実践に努める。

（２）今後も経腸栄養剤や栄養補助食品等の見直しや検討を行い栄養管理に努めていく。

（３）栄養管理業務を実施する上で医療に関わる一員として、学会やセミナーに参加し認定資格の取得・維持をすることでより専門性を高めていくとともに、人材育成としても“認定専門資格(＊)の取得”を目指す。

＊認定専門資格：

NST 専門療法士・TNT-D 認定管理栄養士・日本糖尿病療養指導士（CDEJ）

病態栄養認定管理栄養士・がん病態栄養専門管理栄養士・腎臓病療養指導士

など　（文責　小俣　朋子）

■医療技術科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
主査（視能訓練士）	平岩　弘子	主査(歯科衛生士)	北澤　美幸
上席歯科衛生士	長橋　あゆみ	上席視能訓練士	佐々木　麻理子
歯科衛生士	片瀬　未希	視能訓練士	岡野　夏菜
歯科衛生士（R）	山口　千裕	歯科衛生士（R）	熊谷　さやか
歯科衛生士（R）	深瀬　冴香		

※（R）は臨時職員

2　平成 29 年度の業務実績

（1）視能訓練士

・外来、入院患者に対する眼科検査（表１、２参照）
・脳ドック、健康診断（表３参照）
・月、火曜日の午後、手術室にて眼科手術介助を行った

表１　（件）

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
矯正視力検査	8,882	8,346	8,396
眼鏡処方	169	93	225
角膜曲率半径測定	1,257	1,580	1,576
角膜形状解析検査	5	2	2
角膜内皮細胞顕微鏡検査	541	658	742
静的量的視野検査	890	1,083	1,156
動的量的視野検査	79	76	68
両眼視機能検査	1	177	179
眼底三次元画像解析	1,768	2,098	2,715
眼底カメラ	30	38	72
眼底カメラ（自発蛍光撮影法）	21	24	18
蛍光眼底カメラ（フルオと IA）撮影	101	68	49
超音波検査（Aモード）	146	164	175
超音波検査（断層）	27	－	24
中心フリッカー	129	165	146
定量色盲表検査	17	5	1
ﾊﾟﾈﾙD－15	3	2	3
網膜電位図（ERG）	3	2	2

表１のつづき

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
視覚誘発電位（VEP）	1	－	1
理学　弱視視能訓練	－	6	55

表２　（人）

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
ロービジョン外来	7	7	3
オルソケラトロジー	1	1	5

表３　（人）

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
脳ドックにおける眼底撮影	49	45	46
健康診断	89	32	32

（２）歯科衛生士

①歯科口腔外科における外来業務

・外来診察のアシスタント

・外来外科手術の介助、準備、片付け、全身麻酔下における外科処置のアシスト

・障害者・有病者に対する外来歯科診療補助、全身麻酔下における歯科診療補助

・麻酔科診察時におけるアシスト、患者説明、検査データ確認

②口腔ケア・周術期口腔ケア

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
口腔ケア依頼件数	291	320	422
周術期口腔ケア依頼件数	41	185	219
合　　計	332	505	641

③その他

・院内研修会の講師、富士市立看護専門学校の講師

・日本歯科衛生士会、認定歯科衛生士研修会への参加

・栄養サポートチームへの参加

＊認定専門資格

視能訓練士実習施設指導者

在宅療養指導口腔機能管理　医科歯科連携口腔機能管理

３　来年度の課題

（１）視能訓練士

・質の高い医療技術の提供を目指し、判断力と技術力を高める

・さらなる知識、技術の向上のため、学会や研修会への積極的に参加し認定視能訓練士資格取得を目指す

・他の部門のスタッフとの連携を充実させ安全な医療環境を整える

（２）歯科衛生士

・患者の訴えに傾聴し理解しやすい説明、対応を心がける

・カンファレンス等でスタッフ間の情報共有を密に行い、診療がスムーズに行うことができるよう努める

・周術期口腔ケアの院内周知と依頼数の増加を目指す

・委員会への参加、勉強会、出前講座の講師を継続して行っていく

・各勉強会への積極的な参加

（文責　平岩　弘子・北澤　美幸）

■薬剤科

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
薬剤科長(兼)	井出　宣孝	副薬剤科長	落合　敏明
参事補兼主任	加藤　寛史	主任	三澤　延司
主任	渡辺　浩臣	主任	大滝　哲也
主査	川口　敬	主査	望月　保子
主査	佐藤　実香	主査	木元　慎一郎
上席薬剤師	阿部　一仁	上席薬剤師	後藤　和美
上席薬剤師	柴田　貴子	上席薬剤師	岩本　一徳
上席薬剤師	松田　佑平	上席薬剤師	飛澤　香奈
薬剤師	小林　正典	薬剤師	小坂　裕介
薬剤師	木村　佳弘	薬剤師	池田　嘉隆
薬剤師	遠藤　大介	薬剤師	鈴木　岳瑠
薬剤師	藤井　文音	業務員	高橋　純子
業務員	大箸　悦子	業務員	伊東　江里
業務員	望月　比呂子	業務員	望月　紅野

2　平成 29 年度の業務実績

業 務 分 類	区　分	業 務 内 容
調剤業務	外来調剤	調剤 薬剤情報提供と服薬指導 お薬手帳用ラベル提供 術前中止薬の説明 アレルギー副作用カードの運用（皮膚科・放射線科のみ）
	入院調剤	調剤 退院時、薬剤情報とお薬手帳用ラベル提供
	注射薬調剤	緊急注射・請求伝票による払い出し 注射薬個別払い出し（輸液と共に）
化学療法業務	抗がん剤調製指導業務	入院・外来患者の抗がん剤調製（休日含む） がん化学療法のレジメン・プロトコール管理 服薬アドヒアランスの確認、副作用の把握、減量・休薬や支持療法薬の提案
製剤業務		院内製剤の調製・供給および管理

業 務 分 類	区　分	業 務 内 容
試験業務		TDM（治療効果・副作用管理・処方設計支援）
医薬品情報業務	情報業務	医薬品情報収集・整理・配布・保管、緊急安全性 情報等の院内配布、薬剤管理指導業務への支援、 副作用モニタリングへの関与
薬剤管理指導業務	指導業務	入院時薬歴・相互作用チェック・持参薬の鑑別・再分包・管理・薬の説明・副作用チェック・退院時指導、医師･看護師等との打ち合わせ・カンファレンス出席
薬務業務		購入管理、在庫管理、補給管理、品質管理、麻薬管理、毒薬劇薬保管管理、薬剤委員会業務
治験管理業務		治験薬の登録・調剤・管理
その他	医薬品安全管理	院内ラウンド、リスクマネージメント他
	研修活動	院内・院外研修、学術発表他
	教育活動	腎臓病教室　市内小・中・高校の職場体験
	院内活動	各種委員会への参画、ICT、NST、研修会講師

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
薬剤管理指導件数	5,754	6,187	10,313
持参薬鑑別件数	7,167	7,530	7,674
個別注射薬払い出し件数	249,773	314,463	314,463
再分包件数	2,023	2,570	7,126
ＴＤＭ	358	636	433
保険薬局からの疑義照会件数	3,548	3,572	2,760

３　来年度の課題

（１）薬剤管理指導料及び退院時薬剤情報管理指導料の件数増加を目指す。

（２）チーム医療に携わる薬剤師の育成に努める。

（文責　加藤　寛史）

■看護部長室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
副院長兼看護部長 （日本看護協会認定看護管理者）	遠藤　さよ子	副看護部長（総務担当）	伊藤　すみ子
		副看護部長（教育担当）	大石　悦子
		医療補助員	白井　美登里

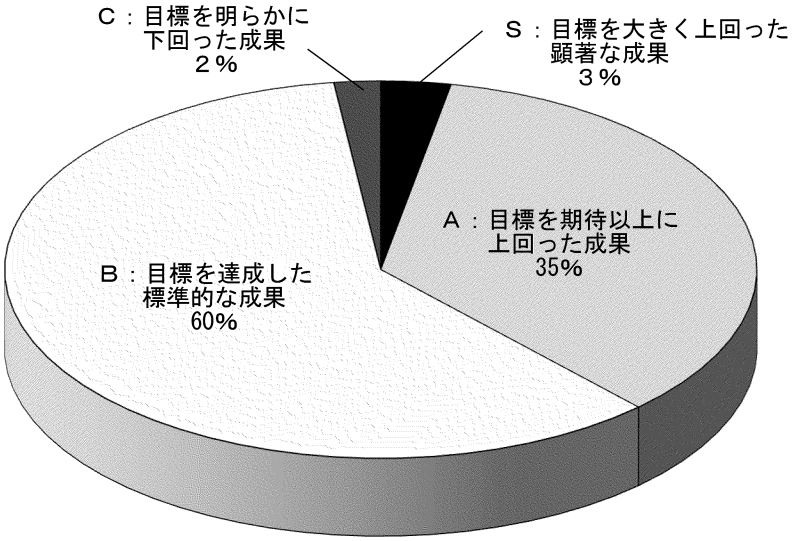
2　所属の特色

看護部長室には、副院長兼看護部長と２名の副看護部長、事務を担当している医療補助員の計４名が在籍している。スムーズな看護部組織運営のため、副看護部長は総務担当と教育担当に業務を分担している。さらに、看護部長室は必要な情報を的確かつ迅速に看護長へ伝達するとともに、看護長からの看護部への報告も徹底され問題解決に向け対応している。

3　平成 29 年度の目標及び評価

目標「**高い看護実践能力で信頼できる看護の提供**」

達成度評価



行動目標

1　知識・技術を深め質の高い看護を実践する

・病棟勉強会を実施し参加率は平均 70%以上であった

・病態生理を把握し看護実践に結び付けた

・勉強会を看護に活かすことができた

・各チームで研修報告会を計画的に行った

・患者参加型カンファレンスの実施（15～25 回／月、各チーム 10 件以上）
・ベットサイドカンファレンス対象者全例の実施
・リハビリ見学を看護師 199 回、患者家族カンファレンスを 51 回実施した
・毎木に NCPR シミュレーションを実施した
・急変時シミュレーションを医師とともに実施した
・出産後の電話相談を 51 件実施し、カンファレンスで情報共有と継続看護に繋げた
・昼カンファレンスや病棟カンファレンスでインシデントの共有をした
・５Ｓ活動と定期的な病棟巡回を実施し環境整備、感染防御対策を実施した
・手指衛生遵守の指導で手指消毒指数が向上した
・転倒転落の安全対策のフローチャートを作成した
・検査・治療マニュアルの見直しと新規マニュアルの作成をした
・在宅看取りを行い振り返りができた

２　丁寧な対応を実践する
・業績評価シート課業「入院患者の対応」で、接遇に関するゴールを立案した
・倫理事例検討を開催した（終末期患者の看護）
・患者の希望を聞き退院調整に繋げた
・業務委員が中心となり療養環境について検討し実践できている
・患者・家族からの「私の提案」が 147 件、92%がお褒め内容であった
・意見や苦情は速やかに上司に報告し対応した
・正しい敬語カードを活用して毎朝唱和した
・接遇５段階評価を行った
・朝の身だしなみチェックを実施した

３　多職種と連携し退院支援の充実を図る
・掲示板を利用し、情報の共有を行った
・各チーム医療ラウンド時のプレゼンテーションができた
・リハビリ見学を行いリハビリスタッフとの連携が図れた
・各回診（化学療法・NST・緩和・褥瘡・リハビリ）に受持ち看護師が参加し情報共有に努めた
・各チームがカンファレンス内容を掲示板、看護連絡表等用いて共有して活用をした
・ピアサポーター派遣などによりサロンの充実を図った
・がん患者サロン利用者は 24 名、ピアサポーター及び対がん協会職員 25 名であった
・多職種と連携を図り退院調整カンファレンスを１回／週実施した

4　業務実績

	で　き　ご　と
4月	昇任　看護長２名、参事１名、副看護長３名、主任８名、主査 13 名 ・第３次採用試験（４名）
5月	・合同会議（働き続けられる職場環境）
6月	・新採用者４名辞令交付 ・７・５階病棟へ看護事務補助者配置（２名） ・市の看護師実務研修への協力（～１月） ・平成 29 年度病院事業計画のインターシップ募集開始 ・第４次採用試験（応募者なし）
7月	・雙葉中学職場体験（４名） ・平成 30 年度採用試験（１次試験）
8月	・高校生１日体験ナース 40 名 ・認知症ケアマニュアル作成、診療報酬取得体制終了 ・インターンシップ（7 名）
9月	・認知症ケア加算２取得
10 月	・平成 30 年度採用試験（２次募集　５名） ・合同会議（人事評価と変則交替制勤務の情報交換を行い共有する）
11 月	・深夜勤４人体制（６Ｂ・７Ｂ） ・岳陽中学職場体験（６名） ・がんセンターCN 実習受け入れ（２名）11 月 29 日～12 月 21 日
12 月	・富士南中学校職場体験（６名）
1月	・認定看護師教育課程（手術室・放射線治療）に各１名合格
2月	・産後ケア事業の取り組み検討（市役所、事務部門、看護部） ・元吉原中学校職場体験（３名）
3月	・認定看護師教育課程（訪問看護）１名合格 ・合同会議（看護の質の向上に繋げる働き続けられる職場つくり） ・インターンシップ（10 名）

＊共立蒲原総合病院（地域連携医療支援室）への看護長派遣は、前年度（平成 29 年度）終了した

＊富士市職員自主研究グループ活動として、16 グループが活動参加した

＊研修報告会を毎月第３火曜日　12 時 45 分～13 時まで実施し、18 名が研修報告した

＊看護部業務改善委員会における「業務成果発表」と、実践を行った

＊日本看護協会資格認定制度　有資格者

・認定看護管理者

	氏　　名
平成 26 年	遠藤　さよ子
	田中　稔

・認定看護師

	氏　　名	分　　類
平成 18 年	村松　由貴子	がん化学療法看護
平成 19 年	望月　久子	手術看護
平成 22 年	若林　久美子	皮膚・排泄ケア
平成 24 年	村松　和歩	訪問看護
	加藤　美奈子	慢性呼吸器疾患看護
平成 25 年	本間　功武	感染管理
平成 26 年	佐野　世佳	集中ケア
平成 28 年	吉崎　美帆	皮膚・排泄ケア

＊院内認定看護師

	氏　　名	分　　類
平成 25 年	赤堀　崇代	退院調整

5　平成 30 年度の目標

「専門性と地域連携を強化し、繋がる看護の提供」

行動目標：１．知識・技術を深め質の高い看護を提供する

２．接遇力を高め、患者満足に繋げる

３．入退院支援の充実を図る

（文責　伊藤　すみ子）

■外来

1　スタッフ

役　　職	氏　　名	役　　職	氏　　名
看護長	北島　美鈴	参事兼副看護長	田中　慶子
参事兼副看護長	佐野　まり子	参事兼副看護長	白戸　幸子
参事兼副看護長	田島　眞弓	副看護長	中村　三千代
副看護長	藤田　久美子	副看護長	柘植　範子
副看護長	戸塚　美晴	副看護長（認定）	村松　由貴子
副看護長(認定)	若林　久美子	主任	小澤　花子
主任	仁藤　伸代	主任	若本　奈緒美
主任	望月　敦子	主任	齋藤　薫美
看護師	75 名	准看護師	６名
医療補助員	45 名		

2　所属の特色

当院の外来は23科の一般外来と、通院治療室･透析室･内視鏡･放射線科･救急外来で構成されている。内視鏡、放射線科では予定された検査・治療以外に、緊急時にも対応できる看護体制となっている。平成29年度は内視鏡検査･治療が3,941件、心臓カテーテル検査･治療が1,305件、その他、血管造影が182件行われた。また救急外来では、地域の二次、三次救急を24時間体制で受け入れている。そのため私達は、専門的知識・技術に基づく安全な医療、看護が提供できるように努めている。

3　平成 29 年度の目標及び評価

目標：知識・技術を向上させ、外来看護の充実を図る

評価：１）研修や勉強会に参加し、知識、技術を高め、外来看護に繋げた

２）各チーム接遇向上に取り組み、患者に丁寧な対応や言葉使いに努めた

4　業務実績

・今年度より通院治療室では、薬剤師が常駐となり、看護師と共に患者の副作用に対応し効果が得られた

・平成 29 年９月より、小児外科診療が第２・第４木曜日に開始され、28 件診療を行った

・循環器外来の待合廊下にテレビを１台設置し、待ち時間の対策に繋げた

・外来看護記録用紙を活用し、救急外来と各科外来との連携を図った

5　平成 30 年度の目標

他部門との連携を図り、安心できる看護を提供する

１）専門的知識・技術を高め、責任ある看護を提供する

２）丁寧な言葉使いと思いやりのある態度で接する

３）病棟・外来・地域と連携し、協働を図る　　（文責　野澤　里美）

■在宅療養支援グループ

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	渡辺　野利江	副看護長	渡邉　裕子
参事兼副看護長(※1)	村松　和歩	主任（※２）	赤堀　崇代
主査	４名	看護師	２名
臨時看護師	１名		

（※１）訪問看護認定看護師、（※２）院内認定退院調整看護師

2　所属の特色

在宅療養支援グループは、総合相談センターと退院調整・訪問看護を担当している。総合相談センターでは、患者・家族が安心して療養生活（在宅・入院を問わず）を過ごせるように、不安や疑問に対して看護師の専門性を活かし相談に対応した。訪問看護認定看護師と院内認定退院調整看護師を中心に在宅支援・退院調整を行い、「より身近に、より的確に、より優しい看護を提供します」を理念に在宅療養移行支援を実践した。

3　平成29年度の目標及び評価

目標：「院内外の他職種と連携し患者家族に専門性を活かした看護を提供する」

１）患者・家族の思いを大切にし、QOLを向上できるように在宅看護を実践する

２）患者・家族の意向に寄り添った退院支援を実践する

３）相談は、患者・家族の思いを大切にした対応をする

評価：１）ディスカッションを行い、患者のQOL向上を考えた在宅看護を実践した

２）多職種と協働して、患者・家族の意向に沿った退院支援を実践した

３）スキルアップに努め、患者・家族の視点に立った対応を実践した

4　業務実績

１）毎週１回総合相談カンファレンスと病棟巡回を実施した
総合相談件数は8,520件／年、うち看護相談7,530件であった

２）各病棟毎週１回の定期的な退院調整カンファレンスと毎月１回の退院支援カンファレンスを実施した。退院調整患者数1,830件であった

３）訪問実患者数74名、のべ訪問回数 1,816回であった

5　平成30年度の目標

平成30年度より、地域医療連携業務の強化を目的に、病院組織に「地域医療連携センター」が新設される。センターには「地域医療連携室」と「患者サポート室」が設置され、在宅療養支援グループも統合されるため、室ごとの目標を設定する。

「地域医療連携室」目標

患者家族が安心して医療が受けられ、安心して地域で暮らせる支援を提供する

「患者サポート室」目標

各専門職が協働して患者・家族に専門性を活かした丁寧で質の高い支援を提供する

（文責　中村　三千代）

■手術室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	小林　由美	副看護長（認定）	望月　久子
副看護長	石川　裕子	主任	伊藤　輝美
主任	杉本　祐介	主任	佐野　陽子
主査	９名	看護師	17 名
委託（ﾀﾞｽｷﾝ）～6月	５名	委託（日本ｽﾃﾘ）7月～	６名

2　所属の特色

当院手術室は、12 科の手術を、看護師 32 名（認定看護師１名含む）で、年間 3,937 件行っている。増加する鏡視下手術や昼夜問わない緊急手術に対して、安全な手術看護を提供している

3　平成 29 年度の目標及び評価

目標：１）手術室退室時間が 17 時を越える症例を 10%以下にする

２）月間手術運用を 300 件以上にする

３）専門的知識を高めるため、年間 10 回の勉強会を開催する

評価：１）17 時を越える手術退室時間は手術件数 526 件に対して 15%であった
12 科中、７科が上記の状況であった

２）月間手術運用は、300 件以上であった
日々、人員配置を検討して緊急手術の受け入れを安全にできるように備えた

３）院内外の研修参加により月１回以上の勉強会を行い、予定回数を上回った

4　業務実績

１）廃材入力システム入力を NHS と診療情報管理士のダブルで行い、収益増に繋げた

２）術後推進チームの活動を基に全身麻酔患者の術後訪問率が 80%になった

３）委託業者に委譲した業務（清掃、器械洗浄、物流管理）の軽減で時間を有効活用して手術間の時間短縮に繋げた

5　平成 30 年度の目標

基幹病院手術室の役割を果たすべく、安全かつ円滑に手術を提供する

１）専門的知識を高めるため院内外研修の伝達講習を５回／年実施する

２）手術室運用を 330 件／月以上にする

３）全身麻酔患者の術後訪問を 85%にする

（文責　森本　康江）

■中央材料室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長（手術室兼任）	小林　由美	参事兼副看護長	後藤　光子
主査	山本　栄理子		
委託（ダスキン責任者）～6月	山岡　隆志	委託（ダスキン）～6月	８名
委託（日本ステリ責任者）7月～	遠藤　真理子	委託（日本ステリ）7月～	６名

2　所属の特色

中央材料室は、患者に安全な滅菌医材を提供するため、委託業者と協力し、院内で使用する医材の滅菌業務（オートクレーブ・EOG・プラズマ）と病棟の検体や医材、伝票類，薬剤等の搬送業務を行っている。

3　平成 29 年度の目標及び評価

目標　患者に安全な滅菌・消毒医材を提供する

１）専門知識・技術の向上に努め滅菌の質保証を高める

２）委託者との連携により、業務の効率化を図る

３）災害に備え、防災物品の管理を行う

評価　１）８月にプラズマ滅菌器の更新に伴い、勉強会を行い、知識・技術の向上と作業時間短縮及び全体業務の効率化に繋げた。高圧蒸気・EOG 滅菌の滅菌機や医材の経年劣化の修理や不良医材のメンテナンスに重点を置き対応、現場での使用に支障のないように努めた

２）毎月第１水曜日にカンファレンスを行い、業務改善に繋げた

３）防災用品の備蓄内容を廃止し、既製品化の導入により日切れ対策ができた

4　業務実績

１）更新された滅菌機から器材の見直しを行い業務改善に繋がった

２）防災用品見直しから既製品化が導入でき、病院全体の備蓄に繋がった
日切れ対策がコスト削減に繋がった

5　平成 30 年度の目標

目標　患者に安全な滅菌・消毒医材を提供する

１）専門知識・技術の向上に努め、滅菌保証を高める

２）委託者と連携し、業務の効率化を図る

（文責　森本　康江）

■ＩＣＵ（集中治療室）

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	齋藤　幸子	副看護長	渡邉　かおる
主任	平元　いずみ	主任	野澤　治
主任	渡邉　葉子	主査	４名
看護師	15 名	看護補助者	１名

2　所属の特色

平成 28 年５月より６床稼働となり、平成 29 年度の延患者数 2,190 名、病床稼働率 87.7%、病床利用率 69.6%であった。科別では、循環器科（心臓血管外科を含む）146 名、外科 119 名、脳神経外科 98 名、内科 26 名、整形外科４名、泌尿器科２名、産婦人科４名、小児科１名であった。看護体制はモジュール型継続受け持ち方式で、他部門と連携・協働し、責任をもって看護を行っている。

3　平成 29 年度の目標及び評価

目標「高度医療に対応できる能力を備え、安心・安全な医療を提供する」

行動目標　１）高度医療に対応した知識・技術を深め、アセスメント能力を向上する

２）患者・家族の声を傾聴し、思いやりのある態度とわかりやすい言葉で対応する

３）退院支援カンファレンスを実施し、病棟との連携を密にする

評価

１）病棟勉強会９回、院内外の研修受講者による伝達講習、開心術後や急変時・防災のシミュレーション、多職種カンファレンスを実施し、知識・技術を深めた

２）「重症患者の家族ニード」について共有し、インフォームド・コンセントの充実に努めた

３）退院支援カンファレンスを確実に実施・記録し、病棟との連携を図った

4　業務実績

１）多職種での心臓血管外科術前カンファレンス 34 件、褥瘡カンファレンス８件、倫理カンファレンス 17 件実施した

２）退室後訪問を 62 件実施し、ICU 入室中の看護の振返りを行った

３）看護研究に取り組み、日本看護学会＜急性期看護＞で成果を発表した

5　平成 30 年度の目標

目標「高度医療の充実を図り、多職種と連携して安心できる看護を提供する」

行動目標

１）アセスメント能力を充実させ、治療や看護実践に繋げる

２）あらゆる場面で相手を尊重した対応をする

３）多職種と連携して、患者のセルフケア能力を高める　　（文責　齋藤　幸子）

■３Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	大塚　君子	副看護長	小野田　智恵子
主任	渡辺　まゆみ	主任	尾崎　悦子
主任	田中　秀樹	主査	６名
看護師	22 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

３Ｂ病棟は、脳神経外科・泌尿器科・整形外科 51 床と、感染病床６床を併設している。病気や障害と共に生きる患者･家族の思いに寄り添い、丁寧で優しい対応、安全で確実な看護、患者の自立支援に努めている。患者・家族と共にカンファレンスを行い、安心して療養生活が送れるよう配慮している。

３　平成 29 年度の目標及び評価

目標「個々の看護実践能力を高め、患者・家族の思いに寄り添った看護を提供する」

１）スタッフ個々が病棟の専門性を理解し知識・技術の向上に努める

各チームで２回／年以上の勉強会を行い、脳外科・泌尿器科領域における知識・技術の向上に努めた

２）患者・家族を尊重した看護を実践する

看護師全員が３回／年以上の患者・家族参画型カンファレンスを実施した。患者・家族の思いを反映させたケアの実践に繋がり、患者・家族から感謝の言葉が聞かれた

３）受け持ち看護師が主体性をもって退院調整を行う

入院３日以内の退院調整スクリーニング、７日以内の患者・家族との面談と多職種カンファレンスを実施した。退院前カンファレンスにおいて、受け持ち看護師が主体性をもって関わり、他職種との情報交換と協働の場に繋げた

４　業務実績

１）患者・家族と共にカンファレンスを行った（88 例／年）

２）新人教育担当者と学生指導者が１回／月話し合いの場を持ち、統一した指導を行った

３）業務改善：患者の蓄尿動線と汚物室の作業環境改善、ナースセンター内の作業環境改善を行った

４）ケーススタディ：「脳出血による高次脳機能障害・嚥下障害のある患者への食事支援について」「初回化学療法を受ける患者に対する看護師の役割について」

５　平成 30 年度の目標

「看護の専門性を発揮し、患者・家族が安心して療養生活を送れる様支援する」

（文責　小野田　智恵子）

■４Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	鈴木　早苗	副看護長	大井　洋子
主任	久保田　京子	主任	山下　かずみ
主任	菅原　早苗	主査（助産師）	４名
主査（看護師）	１人	助産師	８名
看護師	５名	臨時看護師	５名
医療補助員	３名		

２　所属の特色

当院は地域周産期母子医療センターであり、４Ａ病棟は産科単科の病棟として地域の産科医療を担い、妊娠、分娩、産褥の患者さんが入院している。ベッド数は32 床でその他陣痛室、分娩室、新生児室、沐浴室がある。スタッフは一人ひとりを大切にした看護を心がけている。分娩時は産婦のバースプランに基づき、満足できるお産となるように努めている。

入院中の看護、指導の他、妊婦自身が主体的に分娩に臨めるように毎月「バースクラス」を開講している。また立会い分娩希望の夫婦対象に「ペアクラス」を行っている。「助産ケアルーム」では妊婦対象に分娩への準備や不安への援助を行い、出産後の母乳相談も個別に受けている。平成 30 年１月から母乳外来を開設し、母乳を含めた授乳全般や育児について困っている人に対応している。地域とも連携をとり母子の継続支援を行っている。

３　平成 29 年度の目標及び評価

目標「患者・家族に信頼されるよう専門性のある看護実践を行う」

・知識・技術を深めるために自己研鑽する

・一人ひとりを大切にした対応をする

・関連部署との連携を密にする

評価

・NCPR・母乳等の勉強会を予定通り実施することができた

・退院支援カンファレンスを月平均 18 件行うことができた

・電話訪問を 70 件行うことができた

４　業務実績

・NCPR のシミュレーションを、インストラクターを中心に毎週木曜日に行った

・母乳外来を始め、128 名の利用があった

５　平成 30 年度の目標

「チームで支える地域連携と安心できる看護の提供」

（文責　鈴木　早苗）

■４Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	森本　康江	副看護長	滝澤　佐織
主任	西﨑　金苗	主任	松山　桃代
主任	望月　真理	主査	５名
看護師	28 名	医療補助員	３名

２　所属の特色

４Ｂ病棟は、小児科・外科・整形外科・耳鼻咽喉科などの新生児から 15 歳以下の患児が入院している。ベッド数は観察室４床、乳幼児・学童部屋 30 床と、NICU（新生児特定集中治療室）10 床を含む 44 床である。NICU は、富士医療圏のハイリスク新生児を受け入れ、高度医療・看護を提供している。スタッフは患児・家族が安心して入院生活を送れるように、１人ひとりに丁寧な対応を心がけている。

３　平成 29 年度の目標及び評価

目標「患者・家族が安心できる専門性の高い小児医療・看護を実践する」

1)病棟勉強会 10 回／年、急変シミュレーション 20 回／年を実施し、NICU と小児病棟で知識・技術を共有し、看護実践能力の向上と根拠ある医療・看護の提供ができた

2)カンファレンスや看護の振り返りを行い、倫理的配慮を学び丁寧な対応ができた

3)インシデントを振り返り、リスク感性を高めることにより、責任ある看護の提供に努めた。４Ａ病棟と連携し、円滑な業務遂行のための業務調整を行った

４　業務実績

1）静岡こども病院の GCU 研修に２名、愛育病院研修に１名が参加

2）富士市職員自主研修４題：「指差し呼称による５Ｒ確認」「児童・生徒の精神面を支える関わり」「メンバーひとり１人が活躍できるチームづくり」「療養環境の理想を追求する」

3）業務成果発表：「書類収納引き出しの整理・整頓を行い業務の流れを円滑にする」

4）病棟勉強会：小児のアレルギー、呼吸器感染症、熱性痙攣、川崎病、看護必要度小児未熟児医療制度と退院調整、新生児の呼吸循環、人工呼吸器管理、小児救急

５　平成 30 年度の目標

目標「専門性を高め、信頼される小児看護を実践する」

1）知識・技術を深め、安全で安心できる看護を提供する

2）丁寧な言葉と思いやりのある態度で信頼関係を築く

3）他部署との連携を図り、継続した看護を提供する

（文責　齋藤　正美）

■５Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	勝又　千壽子	副看護長	秋山　ゆかり
主任	加藤　珠永	主任	小林　二十美
主任	持田　和美	主査	４名
看護師	24 名	医療補助員	６名

２　所属の特色

５Ａ病棟は耳鼻咽喉科・歯科口腔外科・婦人科・外科・内科の混合病棟である。患者・家族参加型カンファレンス（以下CF）を行ない、患者一人ひとりの思いに寄り添う看護を提供している。スタッフはよく声をかけ合い働きやすい職場である。

３　平成 29 年度の目標及び評価

目標「個々の実践能力を高めチーム力を強化し患者・家族に寄り添った看護を提供する」

１）専門的知識・技術を高め、看護師間のコミュニケーションを密にして、安全で安心な看護を実践する

２）医療と看護の振り返りを行い、患者・家族を尊重した看護を実践する

３）入院早期から多職種と連携して計画的に退院支援を行う

病棟基準を見直し、基準に則って看護を実践した。タイムアウトによる日勤・中日勤間の業務調整が定着し残業は 10％以上削減できた。多職種 CF を開催し患者を尊重した看護・医療について共に考え実践に活かすことができた。患者・家族参加型 CF を行い、入院時から患者・家族の思いを聴き尊重した看護を実践した。

４　業務実績

１）患者・家族参加型 CF 700 件以上実施

２）多職種 CF：多職種で倫理 CF１件・デス CF３件。看護師間で事例検討会３件・リスクに関する CF５件実施

３）病棟勉強会：人工呼吸器、婦人科・耳鼻科疾患、ポジショニングなど６件

４）業務改善：肺炎ケアマップを活用した早期退院推進、正確な看護必要度の入力・記録、褥瘡ケア・栄養評価の教育体制整備

５　平成 30 年度の目標

「個々の実践能力を高め、多職種の役割を認め連携を強化して、患者の“その人らしい”生活に繋がる看護を提供する」

１）専門的知識・技術を深め、根拠のある看護を実践する

２）看護師間・多職種で情報共有し、患者・家族の思いに配慮した優しい対応を行なう

３）入院時から退院まで多職種と連携して、患者と家族をつなぎ“その人らしい”生活を計画的に支援する　　（文責　秋山　ゆかり）

■５Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	松山　早登美	副看護長	東川　真理
主任	遠藤　喜巳子	主任	河合　利枝
主任	諸星　宮子	主査	５名
看護師	24 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

５Ｂ病棟は、ベッド数 56 床の外科病棟である。患者は、消化器疾患や乳がんなどの手術のほか、検査や化学療法、緩和ケアなどを目的に入院している。また、疾患により人工肛門を造設される患者も多く入院している。そのため看護師は、専門的な知識を求められ、定期的に勉強会を実施し知識・技術を深めている。患者が安心して安全に入院生活を送れるよう日々より良い看護の提供に努めている。

３　平成 29 年度の病棟目標及び評価

「知識・技術を深め安全・安楽・個別性のある看護を提供する」

１）知識・技術・を深め根拠に基づいた看護を提供する

人工肛門・口腔ケア・内視鏡などの勉強会を 11 回／年実施し、知識・技術の向上に努めた

２）患者に合わせた細やかな気配りを行う

定期的に医師との患者カンファレンスや看護計画の評価を行い、患者に必要な看護の提供に努めた

３）多職種と協働し継続した看護を提供する

入院時から多職種と連携・情報共有し、継続した看護を提供するとともに患者・家族の退院後の生活を考慮した退院調整を行った

４　業務実績

自主研究において「新人スタッフがストーマに対して知識・技術を習得しストーマケアにつなげられるように支援する」をテーマに活動し、ストーマケアマニュアルを作成した。また、夜間や休日の緊急内視鏡検査に対応できるよう内視鏡室経験者による勉強会を行い、実際の緊急時に実施することができた。

５　平成 30 年度の目標

「地域との連携を強固し、患者・家族の思いを尊重した質の高い看護を提供する」

１）自己研鑽に努め質の高い看護を提供する

２）倫理的配慮で対応する

３）多職種と連携し継続した看護を提供する

（文責　松山　早登美）

■６Ａ病棟

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	遠藤　里花	副看護長	小林　宏美
主任	渡辺　明子	主任	木野村　信子
主任	佐野　幸代	主査	５名
看護師	23 名	医療補助員	５名

2　所属の特色

６Ａ病棟は、血液疾患・内分泌・代謝系疾患の内科病棟である。無菌室２床が設置されており、化学療法とその看護に対応している。糖尿病患者に対しては、教育プログラムに則り正しい知識の習得と自己管理をサポートしている。また、倫理面に配慮しながら患者・家族の思いに添った関わりを大切にし、信頼される医療・看護の提供に努めている。

3　平成 29 年度の目標及び評価

目標「看護実践能力を高め、信頼される医療を提供する」

行動目標　１）専門性のある質の高い医療を提供する

２）倫理面に配慮した接遇を実践する

３）多職種と協働し、退院後を見据えた責任ある退院支援を実践する

評価　１）定期的に勉強会を実施し、専門的な知識を深めることができた。また、ウォーキングカンファレンスを開始し、医療・看護の充実を図った

２）倫理カンファレンスを 31 回／年実施したことで患者の QOL を考えることに繋がった

３）カンファレンスを多職種と共に２回／週実施し患者・家族の意向に沿った退院支援に繋げた

4　業務実績

１）ウォーキングカンファレンスを開始し、安全管理や治療の不安軽減に繋げた

２）倫理カンファレンスでは、デスカンファレンス４件、患者対応カンファレンス９件、事例検討 18 件実施した

３）リハビリスタッフ、医師、薬剤師と共に退院調整カンファレンスを２回／週実施し円滑な退院支援・調整を図った

４）業務改善として、ナースセンター内の作業環境の整えた

5　平成 30 年度の目標

目標「多職種と協働し、個々を尊重した看護を提供する」

行動目標　１）専門性のある質の高い看護を提供する

２）倫理面に配慮した接遇を実践する

３）多職種との連携を推進し、退院支援の充実

（文責　遠藤　里花）

■６Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	齋藤　正美	副看護長	白井　さつき
主任	山中　祐子	主任	前嶋　良子
主任	羽二生　朱美	主査	３名
看護師	26 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

６Ｂ病棟は、腎臓・呼吸器系の内科病棟で、腎臓内科では血液透析・腹膜透析などの検査・治療、呼吸器内科は呼吸不全や肺炎などの検査・治療を行っている。腎臓内科では食事療法や治療の継続が必要なことがあり、自分らしい生活が送れるよう指導している。呼吸器内科では人工呼吸器の管理や在宅酸素療法を必要とされる患者への支援を行い安心安全な看護の提供を実践している。

３　平成 29 年度の目標及び評価

目標「専門的な知識を深め、安全で安心できる医療・看護を提供する」

行動目標　１）知識・技術を深め、責任ある看護を実践する

２）患者家族の思いを傾聴し、一人ひとりを大切にした対応をする

３）多職種と協働し、早期からの退院調整を図る

評価　１）勉強会を月１回行い、参加率は 67%であり、院内外の研修は、一人年間７回以上参加した。急変時のシミュレーションや防災訓練は年２回実施した

２）倫理カンファレンスを月１回、デスカンファレンスを年５回実施し、倫理感性を高めた。また、インフォームドコンセントに同席し、情報共有したことで個別性のある看護実践に繋げることができた

４　業務実績

１）事例検討：倫理カンファレンス年 12 回デスカンファレンス５回／年

２）病棟勉強会：腎疾患・透析療法・呼吸器疾患・人工呼吸器の取り扱い・看護ケアについてなど年 12 回実施

５　平成 30 年度の目標

専門的知識を深め、安全で安心できる看護を提供する

１）知識技術を深めるよう年 12 回の勉強会を実施する

２）患者の思いを傾聴し、患者満足に繋げる

３）地域医療連携センターと協働し、早期からの退院調整を図る

（文責　小林　由美）

■７Ａ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	勝山　弘子	副看護長	芳野　由規子
主任	田中　圭子	主任	本多　すみ江
主任	風早　祥	主査	４名
看護師	26 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

７Ａ病棟は、循環器内科・心臓血管外科 42 床、結核病棟 10 床の病棟である。１年間で約 1,200 件の心臓カテーテル検査・治療が行われ、緊急時には 24 時間体制での治療も行われている。そこで私達は専門的知識に基づいた看護を実践するために、定期的な勉強会、研修に参加している。そこで得た知識・技術を活かし患者・家族に信頼される医療が提供できるよう日々、努めている。

３　平成 29 年度の目標及び評価

「チーム医療を充実させ、患者・家族に信頼される看護を提供する」

１）院内の研修参加は平均 11.9 回／年、院外の研修参加は 1.8 回／年であった

２）入院患者からの「私の提案」投稿数 126 件の内「おほめ」は 93%だった。設備に対しての改善希望が多く、指摘された箇所を修繕するなど一部改善することができた

３）多職種とのカンファレンスは６回／週行われた。倫理、デスカンファレンスも 12 回／年行うことができた

４　実務実績

・看護師と共に医療補助員が、毎日清潔ケアや環境整備を行うことで療養環境の充実に繋げることができている。

・他職種に講師依頼し、病棟勉強会を８回／年開催することができた。

・皮膚・排泄ケア認定看護師は、勤務調整し毎水曜日各病棟からの相談を受け、教育、実践活動を行うことができた。

５　平成 30 年度の目標

「専門性を活かしたチーム医療と退院支援を充実させ繋がる看護を提供する」

１）院内外の研修に積極的に参加し知識・技術を向上させ、実践に役立てる

２）倫理カンファレンスを充実させ実践に活かす

３）多職種と共に患者・家族の思いに沿った退院調整が実現できる

（文責　勝山　弘子）

■７Ｂ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	植松　和子	副看護長	勝又　祐子
主任	渡邉　志津子	主任	勝亦　由美
主任	冨永　美保	主査	４名
看護師	25 名	医療補助	５名

２　所属の特色

７Ｂ病棟は、消化器内科病棟で主に肝臓や胆道系の疾患、胃・腸・膵臓などの消化器疾患の患者が入院する。病棟にある検査室では、消化器内科医師が肝生検やラジオ波（RFA）を実施し、病棟看護師が介助についている。また、夜間・休日の緊急内視鏡も病棟看護師が介助を行い、年間 32 件実施した。看護体制は固定チームナーシングで、患者の気持ちに寄り添い、きめ細かな対応で最善の医療・看護を提供している。

３　平成 29 年度の目標及び評価

目標「患者・家族に安心感を与える医療を提供するために、専門的な知識・技術の向上に努める」

１）消化器内科の知識・技術を深め、責任ある医療・看護を提供する
　教育委員が中心となり１回／月勉強会を行い、知識・技術を深め活用した

２）患者・家族の思いに寄り添い、丁寧な対応を実践する
　倫理４分割法を活用し、患者カンファレンスを 75 回行った

３）多職種と連携し早期退院支援の充実を図る
　多職種と協働し、退院前カンファレンス・退院調整カンファレンスを行い退院支援の充実を図った

４　業務実績

１）病棟勉強会：緊急内視鏡研修を含め 12 回実施

２）業務改善：平日夜勤４人体制を導入

５　平成 30 年度の目標

病棟目標　チーム医療を強化し、安心・安全につながる医療を提供する

行動目標　１）消化器内科の知識・技術を深め、個別性のある医療を提供する
　２）倫理的感性を高め、接遇の充実を図る
　３）看護の役割を発揮し多職種と連携を図り、入退院支援を行う

（文責　植松　和子）

■３Ｃ病棟

１　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
看護長	野澤　里美	副看護長	齋藤　洋実
主任	金森　清美	主任	諸星　美恵子
主任	渡邉　弘江	主査	３名
看護師	26 名	医療補助員	５名

２　所属の特色

３Ｃ病棟は、整形外科・形成外科・眼科・皮膚科の混合病棟である。高齢化に伴い、大腿骨頸部骨折や白内障の患者が多く入院している。ほぼ全員の患者にクリニカルパスを使用し、診察、看護及び自立への援助などを計画的に行っている。

また、大腿骨地域連携パスを使用して地域と連携し、スムーズな転院を目指している

３　平成 29 年度の目標及び評価

目標「他部門との連携を強化し、信頼される医療を提供する」

１）患者・家族の背景を理解し、良好な関係を築く

医師、コ・メディカルで合同カンファレンスを週１回行い、治療方針、経過、社会的背景を共有し、患者・家族が納得した退院指導に繋げた

２）多職種との情報を共有し、安全な医療を提供する

他職種と協働し褥瘡予防対策に取り組み、褥瘡推定発生率が昨年度の 2.2%から 0.5%に下降した

３）知識・技術を高め、専門性を発揮する

病棟勉強会を月１回実施した

４　業務実績

１）受け持ち患者のリハビリ見学を年間 258 件実施し、昨年度より 1.3 倍増加した

２）整形外科・形成外科の手術件数の多い、水・木曜日の中日勤看護師の人員を、４名から５名に増員したことで、より安全な看護の提供につながった

３）手指消毒剤使用量指数の年間平均値は 23.8 と、昨年度より 1.4 倍増加した

４）業務改善として、ナースセンター内の作業環境を整えた

５　平成 30 年度の目標

「一人ひとりを尊重し、地域へ繋げる医療を提供する」

１）患者・家族の意見をふまえ良好な関係を築く

２）多職種と情報を共有し地域と連携する

３）知識・技術を高め、安全な医療を提供する

（文責　柘植　範子）

■病院経営課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
事務部長	杉沢　利次	課長	芹澤　広樹
経営企画担当調整主幹	玉舟　正弥	経営企画担当主幹	木内　啓人
経営財務担当主幹	宇佐美　雄二	上席主事	角入　あゆ美
上席主事	小池　博也	主事	清水　涼真
事務補助員（R）	志田　奈穂子		

（R）は臨時職員

2　平成 29 年度の業務実績

＜業務＞

病院経営課は「病院経営の健全化を推進するため、経営分析及び経営改善を行う」、「病院の機能改善を推進するため、各種施策の企画立案と調整、病院職員の適正配置を行う」、「病院事業の予算を編成、執行を管理し、決算の調製を行い、資金計画を策定し管理する」の主要事業があり、以下の５事業を所管している。

（１）中央病院経営健全化推進事業　　（２）中央病院機能改善推進事業
（３）中央病院予算編成執行・会計決算調製事業　（４）中央病院会計出納管理事業
（５）部内調整事業

＜実績＞

経営企画担当では、経営改革推進委員会の事務局として、第二次中期経営改善計画の実効性を高めるため、平成 29 年度事業計画書を策定し、各項目に対する具体的な取組内容を院内周知するとともに進捗管理を行った。

経営財務担当では、平成 28 年度決算書及び平成 30 年度予算書の調製を行った。

3　来年度の課題

経営企画担当では、新公立病院改革プラン並びに第二次中期経営改善計画の事業計画の進行管理に取り組むとともに、第二次中期経営改善計画の最終年度となるため、第三次中期経営改善計画の策定を行う。また、老朽化が進む病院施設の建替えに向けた検討を始める。

経営財務担当では、予算・決算の調製を行うとともに、予算の適正な執行管理を行う。

（文責　芹澤　広樹）

■病院総務課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
課長	渡辺　利英	総務担当統括主幹	深澤　公保
人事担当統括主幹	鈴木　裕子	施設物品担当統括主幹	中川　貴裕
総務担当主幹	秋山　英希	人事担当主幹	佐野　昌哉
施設物品担当主幹	仲澤　実加	主査	加藤　菜緒
主査	井出　大介	上席主事	中村　崇人
上席主事	佐山　侑希	主事	青木　孝介
主事補	市川　恵未	技師補	岩間　雄一郎
業務員（R）	秋山　功	業務員（R）	加藤　猛
事務補助員（R）	松井　みゆき	事務補助員（R）	坪井　美千代
事務補助員（R）	佐野　友理子		

（R）は臨時職員

2　平成 29 年度の業務実績

病院総務課の業務は、病院運営を円滑に進めるための管理事業を主な事業としている。総務担当、人事担当、施設物品担当の３担当を構成し、総務担当は病院全体の庶務・開設許可事項等の許認可申請、人事担当は人事・福利厚生関係、施設物品担当は施設整備や物品購入を主な業務としており、以下の 13 事業を所管している。

（１）中央病院運営事業　（２）中央病院事務管理事業
（３）中央病院人材活用事業　（４）中央病院勤務条件整備事業
（５）中央病院給与支給事務事業　（６）中央病院職員福利厚生事業
（７）中央病院安全衛生管理事業　（８）中央病院職員研修事業
（９）中央病院市有財産管理事業　(10) 中央病院環境整備事業
(11) 中央病院院内保育所運営事業　(12) 中央病院施設管理事業
(13) 中央病院防災対策事業

3　来年度の課題

引き続き、医師をはじめとした医療従事者の確保に取り組むとともに、高度で専門的な医療を提供するため、職員の人材育成に努めていく。

施設・設備に関しては、平成 30 年度より稼動する「地域医療連携センター」の円滑な運営のための整備を行う。

災害対策事業は、災害拠点病院としての基盤強化を目的に、事業継続計画（BCP）の策定、富士市地域防災計画及び富士市立中央病院地震防災計画に基づく訓練の実施、災害対策用設備及び資機材等の配備を計画的に進めていく。

（文責　渡辺　利英）

■医事課

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
課長	森　育洋	診療録管理事業（R）	市川　もと枝
統括主幹	寺田　和子	診療録管理事業（R）	大川　由梨香
主査	岡本　功	診療録管理事業（R）	小林　朱美
上席主事	杉山　裕亮	診療録管理事業（R）	西川　麻衣
上席主事	杉山　彩	診療録管理事業（R）	藤原　真里子
主事	川口　愛美	システム管理（R）	小峠　加代子
主事補	川本　悦子	医師事務作業補助者（R）	芦澤　典子
診療情報担当統括主幹	若杉　泰之	医師事務作業補助者（R）	飯塚　有紗
診療情報担当主査	露木　秀俊	医師事務作業補助者（R）	生駒　久美子
主査（診療情報管理士）	島田　英介	医師事務作業補助者（R）	内田　裕子
上席主事(診療情報管理士)	齋藤　智恵美	医師事務作業補助者（R）	佐野　秀美
主事(診療情報管理士)	佐野　元美	医師事務作業補助者（R）	佐野　由美子
看護長兼地域連携室長	渡辺　野利江	医師事務作業補助者（R）	清水　みどり
副看護長	渡邉　裕子	医師事務作業補助者（R）	髙田　菜摘
地域連携室統括主幹	岩垣　哲也	医師事務作業補助者（R）	髙室　まゆみ
主幹	加藤　千代美	医師事務作業補助者（R）	槌屋　有希
主幹（MSW）	江村　宏子	医師事務作業補助者（R）	橋谷　理恵
主査（MSW）	佐藤　理絵	医師事務作業補助者（R）	古郡　直美
上席主事（MSW）	遠藤　卓馬	医師事務作業補助者（R）	宮田　由香
主事補（MSW）	前嶋　真理子	医師事務作業補助者（R）	望月　美佐
渉外室長（R）	加藤　裕司	医師事務作業補助者（R）	望月　美咲
渉外担当（R）	望月　加津典	事務補助員（R）	遠藤　京子
通訳（R）	鈴木　智美	事務補助員（R）	菅野　美華
事務補助員（R）	柴﨑　香苗		

（MSW）は医療ソーシャルワーカー、（R）は臨時職員

2　平成 29 年度の業務実績

平成 29 年度に組織改正があり、医事課は、医事担当と診療情報担当に分割され、病院経営課の情報部門（システム室）を医事課の診療情報担当と統合した。

このため、医療情報システムの管理運用を行う業務と、病院の ICT 化を推進する業務が追加された。また、医事担当は、患者に良質な医療及びサービスを提供するための受付等の窓口事務と診療報酬の請求を、地域連携室は患者の紹介受診に係る連絡調整などの病診連携業務や医療に関する相談を主な業務としている。

（１）中央病院窓口事業　（２）中央病院外国人患者対応事業
（３）中央病院診療報酬請求事業　（４）中央病院診療録管理事業
（５）中央病院医事統計資料作成管理事業　（６）中央病院地域医療連携事業
（７）中央病院医療福祉相談事業　（８）中央病院健康診断受付事業
（９）中央病院脳ドック受付事業　(10) 中央病院患者相談窓口事業
(11) 中央病院看護相談事業　(12) 中央病院医師事務補助事業
(13) 中央病院情報システム管理事業　(14) 中央病院ＩＣＴ化推進事業

教育・研修

医事課では、医療ソーシャルワーカー、診療情報管理士が、専門職としての質の向上を目指し、院外研修へ積極的に参加した。

医療ソーシャルワーカー研修

開催日	研　修　名	開催地
４月８日	静岡県ＳＷ研究会	沼津市
４月22日	静岡県医療ソーシャルワーカー協会 東部地区研究会	三島市
５月21日	認知行動療法	東京都
５月27日	静岡県医療ソーシャルワーカー協会 春季研修会	静岡市
６月17日	静岡県ＳＷ研究会	川崎市
８月26日	静岡県医療ソーシャルワーカー協会 中堅者研修	静岡市
10月７-８日	アルコールソーシャルワーク研修	東京都
10月14日	静岡県ＳＷ研究会	川崎市
10月22日	アディクションにおけるソーシャルワーク実践研修	東京都
10月28日	静岡県医療ソーシャルワーカー協会 東部地区研究会	沼津市
12月２日	静岡県医療ソーシャルワーカー協会 秋季研修会	静岡市
12月３日	静岡県自殺未遂者ケア研修会	静岡市
12月10日	ソーシャルワーク研究所シンポジュウム	東京都
２月３-４日	子ども家庭支援ソーシャルワーク研修	東京都
２月17日	静岡県ソーシャルワーク実践研究学会	静岡市
３月３日	静岡県医療ソーシャルワーカー協会 冬季研修会	静岡市
３月21日	アカデミックカンファレンス	東京都
３月24日	静岡県医療ソーシャルワーカー協会 東部地区研究会	沼津市

診療情報管理士研修

開催日	研　修　名	開催地
７月５日	院内がん登録実務者初級修了者研修	東京都
７月８日	診療情報管理士生涯学習研修会	大阪府
７月19日	院内がん登録実務者中級修了者研修	東京都
８月８日	院内がん登録実務者初級修了者研修	東京都
９月３日	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都
10月29日	診療情報管理士生涯学習研修会	東京都
12月13-14日	医療クオリティーマネージャー養成セミナー	東京都
１月13日	DPC マネジメント研究会学術大会	東京都
１月19-20日	医療クオリティーマネージャー養成セミナー	東京都

３　来年度の課題

平成 29 年８月 29 日付けで県知事より地域医療支援病院の承認を受けた。

また、平成 30 年度には医事課の課内室の「地域連携室」と看護部の「訪問看護室」「退院調整室」を組織統合した「地域医療連携センター」が新たに設置される。

このため、今後は、地域の医療機関との連携を更に推進し、地域医療の一層の充実を図っていく。また、地域がん診療病院として、がん診療体制及びがん相談支援体制のさらなる充実を図る。

診療情報担当においては、診療情報の質と精度の向上、高度な管理と活用により、良質な医療の提供及び病院経営の向上に寄与する。

（文責　森　育洋）

■医療安全対策室

1　スタッフ

役　職	氏　　名
室長兼副看護部長（専従リスクマネジャー） ※日本看護協会認定看護管理者	田中　稔
メンバー（兼務）	12 名

2　平成 29 年度の業務実績

1）インシデント・アクシデントレポートの集計、分析

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度
報告件数	2,882	3,151	2,719

2）医療安全相談

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3
相談数	2	2	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0

3）医療安全研修

・第１回「医師が語る事例から学ぶリスクマネジメント」３回開催　参加率 56.4%

・第２回「医療安全体制の現状と課題」ICT との共催　２回開催　参加率 57.4%

4）医療安全関連講義

・看護部講義７回

・看護師実務者研修講義１回（市役所依頼）

・市立看護学校講義６回

5）医療安全情報

・院外からの医療安全情報を関係部署に配布し、情報の提供と周知を図った

6）巡回および再発防止策

・転倒転落グループでベッド周囲の環境調査の巡回を行った。結果はリスクマネジャーに返し安全対策を依頼した

・小児科外来：児が転倒し TV 台に前額部をぶつけた事例に対し、枠の部分にクッション素材を貼付した

7）医療安全活動（マニュアル改訂含む）

・医療安全推進週間（平成 29 年 11 月 19 日～25 日　「誤薬防止」をテーマに全職員に標語を募集し 306 作の応募があった。最優秀標語を 11 月中全職員が名札にいれることで医療安全の意識高揚に努めた

・「入院患者の氏名公表」に同意しない患者の対応マニュアルを一部改訂した

・「医師病棟業務マニュアル」「病棟等の医薬品冷蔵庫の管理マニュアル」を関連部署に改訂依頼した
・「持参薬管理業務運用手順」の見直しを薬剤科に依頼した

８）医療安全対策室たより発行（12 回）
・看護部の部署別種類別報告数を一覧表にし、コメントも付けて看護部リスクマネジメント担当委員会で配布した

９）各委員会、各部署との調査・相談
・診療部に放射線レポート未読対策として、レポートの見方を説明した
・看護部に検体採取時の PDA 認証の周知をした
・薬剤科に「術前に休薬する当院採用薬一覧」を関係部署への配付を依頼した

３　来年度の課題
・医療安全相談を患者・家族のみでなく、職員からの相談にも応じ問題の軽減に努める
・リスクマネジャーのリスク感性向上に努める

（文責　諸岡　暁）

■感染対策室

1　スタッフ

役　職	氏　　名	役　職	氏　　名
室長	後藤　博一（泌尿器科）	専従	増田　満伯（感染対策専従看護師）
メンバー	18 名（兼務）		

※所掌事務のほか、感染制御チーム（ICT）として機能する

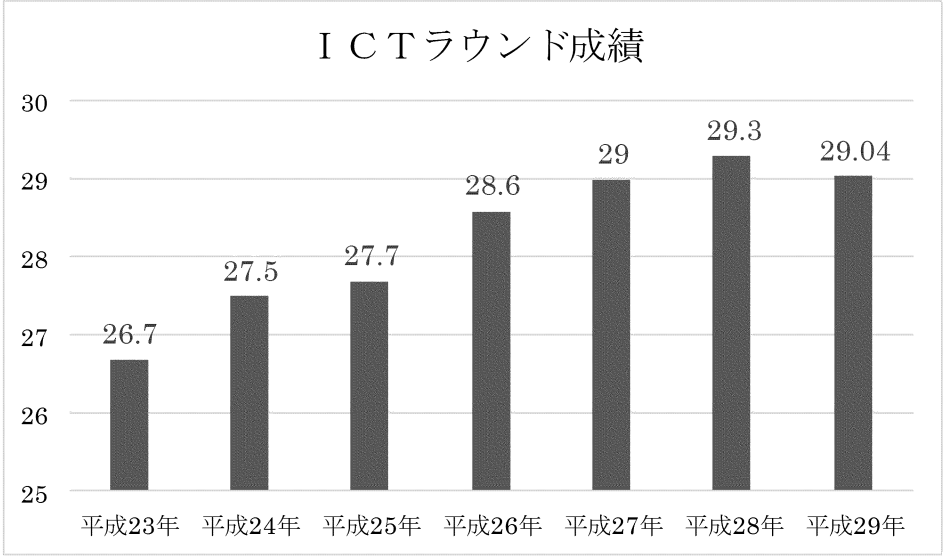
2　平成 29 年度の取組実績

（1）ICT 定例会　12 回（毎月１回、第４水曜日）

（2）耐性菌対策評価ラウンド（平成 30 年１月より毎週火曜日）

（3）院内感染対策室（ICT）によるラウンドを実施

ICT ラウンドは毎週水曜日に 30 項目に対し評価した。今年度から一部評価項目が変更となったため、年間のラウンド平均点は 29.04 点となり昨年度より 0.26 点下昇した。今後も適切な指導と職員一人ひとりが迅速な対応で改善策に取り組めるよう環境を整備していく。その他にも検出菌（MRSA）ラウンド、耐性菌対策評価ラウンド、血流感染ラウンドを実施した。



（4）ICT 主催による職員対象感染対策研修会の開催

①内　　容：「空気感染対策と眼への血液・体液曝露の対策」

開 催 日：平成 29 年８月 29 日（木）

平成 29 年９月 19 日（火）　※ビデオ上映

平成 29 年９月 26 日（火）　※ビデオ上映

講　　師：スリーエムジャパン株式会社　岩村　隆夫

参加人数：544 人

②内　　容：「血流感染対策」
開 催 日：平成 30 年１月 22 日（月）
平成 30 年２月　１日（木）
平成 30 年２月 20 日（火）
講　　師：増田　満伯、本間　功武
参加人数：520 人

（５）感染対策地域連携カンファレンスの開催【全４回実施】

平成 28 年度から参加した聖隷富士病院が脱退し、５施設の感染防止対策加算２取得医療機関【川村病院、湖山リハビリテーション病院、富士脳障害研究所附属病院、富士整形外科病院、大富士病院】と連携し、感染防止技術の向上や最新知見の周知に貢献した。

カンファレンス開催日時
①平成 29 年　５月 24 日（水）18 時より　中央病院（大会議室）
②平成 29 年　８月 23 日（水）18 時より　中央病院（大会議室）
③平成 29 年 29 月 22 日（水）18 時より　中央病院（大会議室）
④平成 29 年　２月 28 日（水）18 時より　中央病院（大会議室）

（６）感染防止対策地域連携加算を取得し共立蒲原総合病院、富士宮市立病院との相互評価を実施

①平成 29 年 12 月 12 日　富士宮市立病院の評価（富士市立中央病院が訪問）
②平成 30 年　１月 31 日　富士市立中央病院の評価（共立蒲原総合病院が来院）

（７）サーベイランスの実施

①検出菌サーベイランス【JANIS】
②SSI サーベイランス【JANIS】
③ICU サーベイランス【JANIS】
④手指衛生指数サーベイランス
⑤血流感染サーベイランス

３　来年度の課題

平成 30 年度から AST（抗菌薬適正使用支援チーム）の立ち上げを見据え、毎週火曜日に耐性菌対策評価ラウンドを実施し、院内で検出されている全ての耐性菌に対し抗菌薬の使用状況を確認し評価していく。職場の環境改善と感染防止策の遵守率向上を図り、医療関連感染の発生低減に努める。さらに、最新知見を導入したマニュアルを再考し、効率的かつ確実な感染防止策を導入する。

サーベイランスを継続し、感染症の発生やその原因菌に関するデータを継続的に収集・分析し、必要な対策を講じる。また、近隣施設からの相談等にきめ細かく応じ、地域医療の向上に貢献していく。

（文責　後藤　博一）